

なんていふほど、べら棒に出来上つてゐない廣田君は、つべこべと事面倒にならぬ前、さつさと郷里福岡に歸つて、両親任せといふ頗る舊式、簡単な條件の下に、妻君なるものを受取つて来た、これが現夫人のみす子さんなのである。

お次の候補者

廣田君のこの硬骨ぶりに、加藤伯は怒りもしなかつたらうが、當が外れたことだけは事實だつたらう。

それぢや、次ぎの候補は帝大銀時計組の富田勇太郎だ、といふので秘かにさぐりを入れて見たものだ。

隠すよりは現はれるで、この話はバツと世間に傳はつた、三菱を背景に有つて、時めく加藤高明の愛嬢の婿がねとなるのだ、世間が黙つてゐられべき筈のものでない。

「富田は好運者だ、果報者だ」

さうした聲が嵐のやうに起つたものである。

ところが、この果報者の富田君が、肋骨が一本不足してゐる、といふ變な噂が立つた、まさに變な噂である、おそらく幸運をねたむ悪戯者のいひ觸らしたらうと思はれた、加藤伯もまた「變なこともあるものだ、あの富田が肋骨が足りないなんてことはあるものか、これは乾度、誰かゞ水を注したに相違ない」

位にたかを括つてゐたらしかつたが、噂は七十五日経つても消えやうとはせず、愈々ますます燃え盛つて来るのを何うすることも出来なかつた。

これは加藤伯が對支二十一個條で責任を問はれるよりも困つたことだつた。

「然なバカな話があるものか」

と何遍うち消して見ても、後から後から起つてくる噂の影は、だん／＼濃くなるばかりだ、そこで、この金佛さまは窮餘の策もなくなつて、そつと富田君を呼び寄せ、自分自身でその眞偽を聞きたゞす決心をしたものである。

「おい富田、君のあばら骨は一本足りないのかね」

とぶしつけに訊問したか何うかは小生の與り知らぬ所だが、とにかく二人の對話のうちに昂奮

した富田君が

「閣下バカなことを信じては困ります、そんなことが有るものですか、なくてたまるものですか」

といふ一節があつたらしい。

あばら骨がない

富田君、生れて未だこんな難關にぶつかつたことはあるまい、躍起になつて無性やたらに打消したであらうが、容易に信じないかはり一旦疑念を懐いたら、また容易に晴らすことの出来なかつた加藤伯は、富田君の辯明だけでは、その肋骨が果して一本不足してゐるのか、ゐないのか、斷案を下すの道がなかつた。

信念を破るものは科學以外にはない。

加藤伯は、弱り果てた末に、この科學の斷案を俟つことにしたらしい。……それから間もなく。――

富田君と加藤伯とは或病院を訪れてゐた。X光線といふ奴は、まことに以て皮肉で、そして正直者です。

「そんなバカな話はあるまい」

と打消してゐた加藤伯も

「或は？」

と思ひ込むやうになつたほど世間の噂のうるさい肋骨である、富田君は

「べ、ベラ棒な、そんな大ベラ棒があるものか」

といつて見たところで、いまこの皮肉な正直者の光線に透視されて完、不完の決定を與へられる譯だ。

「済まぬな、こんなことまでさせるのも、娘が可愛いからだよ」

剛愎ばかりの高明伯ではない、この時心のうちに斯う語つてゐたであらう。

富田君は、無いものを、有るといつても、加藤伯の婿になりたいほどの男でないこと勿論である、自分の肋骨が完全に左右十二本づゝあると信じてゐればこそ、勇敢に何の怖れ氣もなく

暗室に入るや否や、素ッ裸になつて反射器の前に直立したものだ。

技師の手がスイッチを切る運命は一瞬の後に決せられた。

醫師の天職は信じた所を行ふにある、それよりも正直である機械は、寸分の手心をも與へず
に映像した、その結果が、どんな形に富田君の肋骨を寫したかは知らぬとして、この縁談は中
止となり、加藤伯も富田君も悲しき顔を見合はす勇氣もなかつた、あまりにもはかない幻滅で
あつた。

家柄とあばら骨——そこに悲劇と喜劇を求めやうとする人は求めたがよい、事實は斯くして
家柄とあばら骨から、高明伯の愛嬢を岡部子爵の許に嫁がしめたのである。

酒嫌ひの酒豪

白面の一青年

時は明治二十四年、そのころ「當代の酒仙」と自他ともに許した西村醉處が、大阪府知事か
ら農商務次官に轉任して來た折のこと、この歓迎會をあたり前にやつては面白くない、何かな
一趣向こらして、彼をアツといはせやうとの隠謀がめぐらされたものだ。

そこで、この歓迎會の孔明の役をつとめたのが、時の商工局長齋藤修一郎で、その深謀の
軍略といふものは、酔處と雲梯を並べて、酒合戦をさせるといふのであつた。

この時雲梯のいで立ち見てあれは——といひたいが、氏は明治二十年に大學を出て、官途に

ついたばかり二十九歳の一青年、勘平そこのけの美男であつた、そしてお役柄は書記官と農商務省の参事官を兼ねてゐた。

この陰謀には、單なる悪戯ばかりでなしに、西から來る醉處を、是が非でも打ち負かし彼の酒豪の鼻を折つて、江戸お膝許の意氣を示して呉れといふ大役が含まれてゐた。年は若し、性來の負けじ魂、ましてや酒には自信のあつた雲梯は

「なアに酒豪だの酒仙だのと豪語したつて何ほどのことがあるものか」と既に意氣彼を呑んでゐたらしい。

場所は紅葉館の廣間、この酒合戦こそ實に物々しいもので、雲梯若し萬が一敗くることあらば新手さしかへて鬨はせんと、少壯酒客が六人、後詰として腕を張つてゐたものだ。

やがて戦闘準備は進み、さて愈々宣戦布告さるゝやどちらからともなく

「小さいのは面倒だ」

イヤ應の氣合よろしく、醉處のとりあげた獲ものは吸物椀、雲梯は大杯洗をとり上げた、これを活動の辯士君に述べさせたら

凄氣暗たんとして場に滿ち、吸物椀と杯洗の刃先きは火花を散らして相搏つた。こどもでも申すべきところか——

呑みも呑んだり四升八合

片や吸物椀には、片や大杯洗、これで先づ一座の度膽は抜かれてしまつた。

醉處先づ吸物椀に盛りこぼるゝやうなのを、ぐうツと呑み干して雲梯にさす、雲梯にツこと笑んで受け、きうツと息をもつかず一氣に呷つて醉處次官に返杯、これを劍法にたとふれば、醉處は老巧に味を見せ、雲梯は血氣横溢、ニベもなく打拂つたかの感がある。

彼させば我れ受け、我れさせば彼受けること幾回か、四合入りの大杯洗で兩人の干した酒四升八合、戦ひは進んで十二回戦の表で、流石の猛者醉處も爪の先まで酔ひつぶれて舌を巻いて紅葉館を引上げてしまつた、かちどきを擧げた一同はこの日の殊勳者雲梯を取り巻いてやんやと喝采したが、これだけ飲んで雲梯は、未だ顔の色一つ動かさず、人々が俵をすゝめるのも耳にしないうで、駄足をしながら烏森の某亭に引上げ、改めて戦勝祝賀の酒宴を開いたといふから

驚いたものである。

このこと以来、雲梯は酒でん童子のやうにいひ難されたが、實は酔處との酒合戦に雲梯には一つの秘策があつた、といふのは何ぼこの呑平だとして、僅か二時間ばかりの間に、杯洗で二升も平げられるものではない、彼は酔處と立合ふ時に、一體何升飲めたら勝つのか、何升呷つたら彼を登せるのかその見當がつかぬ、その爲めに前日から淡さりした消化の少ないものを少量、今日は午後の四時に飲み始めるといふから、朝は少し遅れて九時頃、晝は一時半から二時頃に食事をし、この食事とても一通りのものでなく、粥に梅干位にしておく、これは吐いても苦しくない爲めの用意なのである。

さて、いざ飲むとなつた時は、チビくなどやつてゐたのでは堪らぬ、即ち杯洗で息もつかず、ぐうと呷る、次の二杯目は矢つぎ早に引掛ける、これ先に入つてゐる酒の酔ひの廻らぬうちに、次を入れて、量に於て對手を倒す秘法の一つなのであるといふ。

一杯まづ四合、たて續けて又一杯、これで八合は平げたことになる砂繪呪縛の孫之丞ではないが、水鷗流の居合の呼吸だ抜いたと見るやいな八合、即ち四合入り杯洗二つを呑んでしまつ

たのでは、相手の毒氣を抜き機先を制する早業の見ごとさは完全である。

斯うして入れた二杯、雲梯は直に立つて後架に入り、その悉くを吐いてしまふのだ、この時の用意の爲め、彼は前日から食物に注意してゐたのである、吐いて後はこつそりと濃い茶一杯呷つた八合の酒、どこへ入つたといふ面持ちで座に歸り

「さア一杯」

とまたぞろ杯洗の催促だ。

左様な權謀術策があらうとは露知らぬ酔處は「此奴、油断のならぬ大敵」ぐらゐに思つて又さす、受ける、さす、受ける、何度繰返さうが、同じこと、遂に十二回目計つて四升八合呑んだ時、流石の酔處もへべれけになつてぶつ倒れるやうに尻尾を捲いて逃げたのである。

雲梯氏は、この一騎打以來、天下の酒豪として無敵の位置を占めた、尤も此頃の氏は家庭と官界とに内外の不平があつた、その自棄酒も手傳つてゐた、更に越えて三十二年の頃は、一身につき纏つた政治上の疑惑を避けん爲め、酒杯に逃避した爲めもあつた、醉翰長か粹翰長か、世間ではどちらの字を使つても通るやうな生活の人となつたのであるが、林田氏自身は僕は酒

は嫌ひだ——といつてゐた。
 あれだけ飲んで酒が嫌ひも甚だ臍におちぬことではあるが、事實、氏は酒をうまいと思つて飲んでゐるのではなかつた、その例としては、決して晩酌をやつたことがない、議院内にパイが開かれて以來奥繁三郎、江藤哲藏氏等の酒狂者は、年中入りびたつてゐたものだが林田氏がパイで管を巻いてゐた姿を見たことなく、宿酔で顔の色の悪いことを見たこともない、全く氏自らのいふ通り好きで飲んだ酒ではなかつたらしい。

大晦日の晩に半樽

時代が明治二十年前後である、苟くも政治を談じ、社會を論ずるほどの者、酒が呑なくては人間並のおつき合ひの出来なかつたもの、そこへ行くと地震以後の日本人は算盤が高くなつた世間苦、社會苦も亦深刻になつた爲めかも知れない、酒も世渡りの程度内で酔ひもせぬのに酔ふたふり、酔ふたに係はらず酔はぬふりをしなければならぬ現代人は一面可哀想である。
 林田氏の酒は、時代が彼に飲ましたよけのもので氏がいふ如く、決して酒を好んで、酒を、

て居られぬ爲めに呑んだものではない、然し、酒に關聯しては、種々な風評が生れ易い、元來が淺酌低唱が得意でなく、四疊半裡の粹な眞似の風流氣もなかつた氏が、あらぬ浮名を世間に傳へられたのは、尾崎紅葉だの、長田秋濤だのと共に俗語、狂歌をこね廻し、花柳界の口端に上つたがためだつた。

だから氏は曾たかういつたことがある。

「たゞ義理と張りと交際とで、毒を飲むが如くに酒を呷り、呷いでは吐き、吐いはて又呷るといふ有様に過ぎぬ、斯くいへば所謂粹翰長の粹の字は抹殺せられねばならぬが、予としてそれが本望である、無粹の身誤つて粹客の扱ひを受け——云々と、

まつたくその通り、氏の長逝に會ふた時、或人々は、氏は酒と女の生活に、その生命を縮めた、或は縮める素因がそこにあつた——と評したが、小生から見ると、氏は決して酒に耽溺した人でなく、寧ろ身を處すに謹嚴、そして衛生に注意した人であることはその當時からの日常生活に見ることが出来る。

もつとも例外はいくらもある。

其一つは氏と同郷同學の出身で大學も同時に出了内田康哉伯が、明けてあすは明治二十年の元旦といふ大晦日の晩、ふらりとやつて来て

「どうだい正月の仕度は出来たか」

といふやうな話、

「別に仕度もないが、酒だけは半樽備へた」

それは何より結構といふので、二人は御輿を据へて飲み出して、たうとう除夜の鐘、さア飲めやつてゐるうち、東が白んだ、まだあるぞとばかりやつてゐるうちに元日も正午となつた折、半樽の底を叩いてしまつて

「もう半樽急いで届けさせる」

といふ勢ひ——この外にも内田伯との間には随分面白い酒もの語りがあつた様子だ。」

昔のなんせんす

これから書かうとするのは、昔のバカ噺である、今日行はれる落語などは、これらの話から題材を得たものが多い、甚だ昔風なのと関西なまりが多いので、意味の不明なものは翻譯することとする、尙ほ當時は検閲がやかましくなかつた爲め、今日その儘こゝに掲載すると風俗壞亂などといふ恐い目に會ふものがある。夫を出来るだけ遠慮することの是非なさを御諒察、そのおつもりでゆる／＼御愛讀たまはらんことお願いす、先づはその爲め口上左様。

秋の空

弟子「先生、昔の芭蕉といふ人は發句の名人ださうにござりまする」

先生「そりや又格別ぢや、芭蕉の秋の句に、ふけ行や花なら紙に押すものを——といふ句はまことに妙ぢや、八月の十五夜の月の更け行所は、どうもえもいはれぬ、花ならば何程美しくとも紙に書けるけれども、今宵の月の更け行く所は紙にも書かれぬといふ句ぢや」

弟子「けれども先生、ふけゆくやはななら紙に押すものを——では分りにくい。いたらふけ、はななら紙でかむものを——としたら何うでせう」

先生「そりや何のことだ？」

弟子「糞をしたら拭きませう、よつて、いたらふけ——でせう。鼻水が出たらふくといはずにかむといひます、よつて、はななら紙でかむものを——です」

この話は、實は別な意味をノメ——と書いたものであるが、それをその儘にするわけには参らぬ、爲めに作り替へたものだが軽く妙味を捉へてゐると思ふ。【筆者註】

忠臣蔵料理

道頓堀の芝居近所へ、京の祇園町一力の出店とて、近頃店出しけるが、表へ「忠臣蔵料理」

といふ行燈を出しければ、侍一人入來り

侍「なに亭主、其方は忠臣蔵料理を致すといふこと、然し予が先組は鹽谷判官公の家中に於てその名を得し者なるぞ、さあその御ぜん早く出せ」

亭主はハイ——かしまりましたと膳を出したを見て

侍「こりや、小皿にあるはどうからしないでないか、こりや何故だ」

亭「ハイ、これが大星由良之助さま赤穂家老でござります故、赤うて辛ふござります」

侍「なるほど面白い。此鮎は焼ものか、小さい焼ものだの。三枚ながら皿の中にへばり附いておるが——」

亭「これが三段目でござります。師直が判官公をば呼とめて、遅し遅し貴殿はなぜ遅かつた。

(ト皿をしへて)内にはかりへばり附いているを、井戸の鮎ぢやといふたとへがある。鮎ぢや——鮎さんまいぢや——と申します」

侍「いよ——面白い、夫はよいが御飯は、田舎の法會のやうに上に木のめがひつ付いてあるが」

亭「ハイ、これが五つ目、與市兵衛が申まするに、此財布はあとの在所で草鞋買ふとて端た
錢を出しましたが、あとに残るは中食の握り飯でござります」

侍「御膳の飯に握り飯は珍らしい、してこの木のめは何だ」

亭「これは四段目判官腹切の段、力彌、山良之助は——ハ、アいまだ參上仕りません——と
山椒のならぬうちは木の芽でござります」

侍「なるほど分つた。どれ平の内は何だ」

と明けて見ると、お平の中には蟹が大さう目をむいて恐ろしい。

亭「夫は九段目にて、加古川本藏が師直の屋敷繪圖を力彌に渡す、力彌取つて押いたとき、開
き見ればこはいかに——ひらあけ見れば強い蟹——でござります」

侍「いやます、面白。して握り飯に胡麻がふりかけてあるがこれにも譯があり相な——」

亭「いかさまそれは、雪の様な白い御飯に黒い胡麻、雪の夜に黒装束で亂入の體でござります

侍「それはよいが、鮎のいり附、蟹の鹽いり、飯にも鹽が有る。これを食ふたら定めし咽喉が
かはくであらうが……」

亭「その鹽辛いのが鹽谷判官様、鹽谷の鹽の字と、赤穂さうどう故みな鹽からうしてござりま
す。どうせ咽喉も忠臣藏のかはきうちぢや。それはさうとお侍さま、御酒は召上りませんか、
私のところの酒は「七ツ目」と申しまして、どなた様にも相性がようござります」

侍「七ツ目なら、捉まへても吞まさうといふ心ぢやな」

亭「私の方は祇園町の出店、なか、一力ある酒でござります。最前からあなた様のお手が鳴
つたら持つて行かうと、めんないちろりに入れてあります。またちろり焼などの酒お嫌ひな
方様には、硝子の徳利へ入てあげます。早速と出します所は、二階のおかるの夫、早野桐瓶で
ござります」

侍「サア、此方も二階のおかるぢやから止めにせうかい」

亭「二階のおかるとは高いと仰有るのぢやろが、それも手を出し足をいたゞく蛸肴ぐらでお
上りなされますと、お安ふつきますが、鶏、鍋焼と仰有ると六かしふござります。マア蛸肴で
ゆるゆると、先崎(せんざき)の障子でも明け放し、酒もり喜多八をなされて、無性矢間(やさ
ま)に洒落なされて何うでござります」

侍「そんなら酒に酔ふて九太夫でも件内か」

亭「何ぼなりとも大星めし次第」

侍「しかし此方が二階のおかるぢや止めにしよう」

亭「高いことはいたしませぬ、随分足輕寺岡平右衛門と致します」

侍「鶏、鍋焼など、重くるしうなく、外に肴のしやるはないか」

亭「へエ、魚もいろ／＼と買込んでござります。そのうちにてお好みものを仰しやつて下さ
すませ」

侍「一たい魚は何々ある？」

亭「おかるの申しまする文句の通り」

細魚の鮎は鰯を、蜻に立ての鯛だちか、いとま鯉にもみいそなものと鱈ではつ王餘魚を
りました。

とこれだけ買込んでござります。そのうちにて何なりとも——」

侍「さうして勘平ぐらゐで呑めるか」

亭「勘平とは？」

侍「ハテ勘平どのは三十に、なるやならず二十七八文で——」

亭「めつさうな」

侍「そんなら徒黨の人数四十七文ぐらゐでは？」

亭「めつさうな」

侍「いや／＼、よく／＼考へれば二階のおかるぢや、やめておころ」

亭「お侍さまその様に安うて呑めるものぢやござりませぬ」

侍「イヤ、二階のおかるとは高いことではない。我身ながらはしごに困る」

【註】 忠臣藏に因む話は、尙ほ後にも出るだらうし、他にも澤山多いが、これなどはあつさ
りと片附けてある。

おどけ忠臣藏

京都の山科に、大星甲良之助のかくれ家あり。此ところの裏手へ忠臣藏といふ藏を立たいと

皆々打寄りけるに、此うらに大きな先崎(せんざき)あり、この所にて彌五郎といふ石あまた持運びるに、生茂りたる竹林のこなたに喜多八のかゝりたる池があり、その傍におよそ目方薬師寺貫目ばかりなる大石あり。此石をば治郎治郎と見渡し、この石鷺坂にうち槍おいても伴内かとたづねたら、イヤはや早野にのけたら、勘平がよいといふ。

つきのけて由松事ならば、わしも寺岡か出て尻から平右衛門をきばり出し、わしも加古川と本藏をもんだれども中々動かぬ。何ぼおわしかいて働いても、文吾ともせぬゆへ、皆々原郷右衛門立て、エ、いまくしい矢間(やさま)の悪いと重太ところがしやうもない。コリヤ誰ぞを太田のみ申し、了竹(りようちく)とばかり與市兵衛だして貫はにや、この石はでつちまでも伊吾くまいといへば、いやくたとへ何ほど桃井(もものゐ)石でも、年若狭之助なものを呼あつめたらよからうと、京都祇園町一力の亭主、これは大方あげやであらうと急に呼寄せければ中仲居大ぜいの人、たいこをもつて囃し立て、力彌ッとある上に、鹽谷(えんや)とかけ聲を出し、からだには小浪のうつつほど汗かいて十七瀬(となせ)いでしたら、おその、おいしが、おかるに上つた。

やれく中々天川屋なことで行かなんだと、皆々義平直して打笑ひる所へ、此石をわしに九太夫といふものあり、わしに師直(もろなふ)といふ。又斧九太夫の倅が来て、わしに只九りよ(定九郎)といふ。そんならあしが二貫五百か判官にでも、顔世御前といふ者が来て、石はそれで納まつたが、その跡へ藏を立てるがよいふとい者と、放れ座敷にするがよいといふ者あり、また御所は見はらしのよい所ぢやによつて、物見を立てるがよいといふ者あり、評議まぢくにて、いや、やつぱり先からいふ通り、藏にするがよからう、いや物見がよい、いやく放れ座敷がよいと、我いちにいふてゐたが、とうとしまいには柴部屋でさまつた。

【筆者曰】これは忠臣藏名寄せ話、序でのことにこゝに軽い味を採つた。

忠臣藏穴さがし

穴さがし即ちあら探しである、探し初めると穴もあらも随分あるもので、これを巧妙にやることによつて有名になつた人に皮肉屋のシヨ一なんて人がある。

一時流行した誤譯指摘、わが同業の間にもとかくこのあら探しが流行する傾きが見えて来た

いゝやうな悪いやうな變なものである、小生は同業間のあら探しは嫌ひだが、浮世の穴やあらなら遠慮なく探して見たい性である、忠臣藏あら探しもこの一つ。

大 序

從來の芝居にはこんな穴があつたといふまである。

鶴ヶ岡八幡宮の段で、八幡宮御造營につき、足利左兵衛直義公が、只尊氏の代参として重き身になりながら、鹽谷の妻のかほよを召し「兜の木阿彌目利き目利き」とは餘りに洒落が過ぎた詞遣ひ、これは少し人體に似合ぬ仕儀と思はれる。

それから、兜の数は四十七、或は直平すじ兜數多し中にも、五枚兜の籠がしら、とあるからは、他に類のない品で、たとへ後家の質屋でも疑ひなく大將の兜と値打ちを入れる筈、それをわざ／＼かほよを召して改めさせるとは、餘りと申せば馬鹿可笑といはねばなるまい。

二 段 目

桃井の邸へ、鹽谷判官の大切な使者として大星力彌を遣したに對し、家來の女房の取次ぎが既に腑に落ち兼ねるのにまだ年のゆかぬ小浪に取次をさせるとは、第一使者に對して無禮であり、いかにも桃井の邸の風儀がだらしく思はせる、そればかりか若狭之介が「聞いた／＼使大儀」といふて、一間より立出て力彌に對面などは、どうも輕々しくてまるで町人同様でないか。

三 段 目

正七ツ刻西の御門の見附の方、ハイ／＼と提灯照らして入來る師直の途中を擁し加古川本藏が後から早馬で追掛け據どころなきことはいひながら、夜中に往來へ巻もの三十本、黄金三十枚を始め、數々の進物、地べたに並べるとは、何う見ても粗忽千萬なことではないか、役儀引廻しの賄賂でござるぞ、もちつと秘密に捨與しないと、すぐ警視廳にバレます。

同じ三つ目で、けふは御殿に於て大切な饗宴のある、上を下への忙しい中にさよごろもしてな歌を持たせてやる顔世御前、ちと場所柄、時節柄、御遠慮めされといひたくもなる、それ

とも顔世御前といふ女モガカナ——」

四 段 目

鹽谷判官閉居を申附けられ、大竹にて門戸を閉ぢ、いとも事嚴重なる謹慎中に、鎌倉山の一重八重いろ／＼の櫻を取寄せて、殿の御氣を慰めんとの趣向は甚だ以て合點のゆかぬ次第である、この櫻花は、まさか閉門中に出入の花屋に申附ける譯にも參るまい、去りて家中の者が内密に取りに行つたとも申されまい、第一閉門中に陽氣な櫻の枝をいろ／＼と取扱ふこと、それ自體が足利が憚らぬやり口ではないか。

又この場で、顔世を御臺所或は御臺などいふが、本來御臺所とは重い呼び名で、伯州の城主には不都合といふべくこれは奥方といはねばならぬものでなからうか。

更に、石堂、藥師寺が上使として來た時に「先づお盃の用意せよ、一こん酌んで積鬱を晴らし申さん」などは、飛んでもない無禮、殊には切腹の檢視だ、それは判官も承知の助、それに打ちくつろいでお酒などうちと合點のゆかぬ話ではござるまいか。

五 段 目

由來忠臣藏の芝居では、九太夫親子といふものは邪智深いものに仕組まれてゐる、それに何で定九郎を勘當したのか、ちつとやそつとの悪事をしたからとて、子を勘當するほどの神妙さがあるなら、忠臣藏の九太夫は逆も役が勤まりさうもない。

勘平どのは猪を二つ玉にて撃ち止め、たしかに手答へあつたといふに、猪にはあらで旅人、南無三寶、過つたり——と死んだを承知で死人の懷中を探し、藥はないかもないものぢやないか、たとへ懷中に藥はあつても二つ玉で射止めたものが何で生き返られませうぞい、起死回生といふは賣藥の廣告、これほど確に死んだものを、蘇生させる術と藥は不幸いまだに發見されませぬ。

更にこの日は六月二十九日、いづれ舊曆だらう、さすれば七月も末か八月、時は三伏の炎暑然るに與市兵衛は、茶の紋付または憲法小紋などの綿入れ、一方定九郎は黒羽二重の綿の出たやつ、いやはやこれは、旗本のつむじ曲りその瘦我慢ならいざ知らず、お暑いことござる、

大體與市兵衛などといふ老ぼれが、大金もつて夜中歩きが甚だ危険、了簡ちがひ此上なしと申して然るべきに非ずや。

六 段 目

與市兵衛の死骸を戸板に載せて持つて来たのに勘平は、いくら自分が殺したものだとして、何故に死體を改めて見ないのか、ゆふべは暗にまぎれて確に分らぬ筈、今日はとつくりと改めた上で、自分が殺したのなら、せめては死骸に詫でも申して、通例ならば切腹でもしたがよい、それに一向見向きもしないで放つとくなんザア、つれなからうぜ勘平さんだ。

また、原郷右衛門、千崎彌五郎の二人は、家内混雑の愁嘆の中でおもへばこの金は、掣と舅の財布のしま黄金——なんかと口合せのしやれ文句はちと不謹慎、さらにこの金は、掣と舅の七七日、四十九日や五十兩、合せて百兩百ヶ日の追善供養、あとねんごろに弔はれよ——など大取込み最中、一人取残されて泣きの涙でゐる老母の身になつて見ろ、口惜さに胸ふるひがするだらう。

七 段 目

人の出入りの激しい一力の座敷で、矢間十太郎でござるだの竹森喜多八で候、千崎彌五郎御意得に參つた、お目覚めなされませうの大聲、鎌倉へ打立時候はいつ頃でござるだの、一味連判の者どもへの見せしめなど、四邊かまはぬ聲高は、思慮も分別もないボンクラ野郎共ではないか、なるほど由良之助も骨折れたこととお察し申す。

陰をかくすや月のいる、山科よりは一里半、息を切つた嫡子力彌——といふ文句で見ると、このお月様は山に入つたと思ふが當然、然るにその後由良之助が文を読むとき、下家よりは九太夫がくり下す、文月かげにすかし讀むとは神ならず——とある、これぢや一晚の中にお月様が二度出る譯、天體の大異變、とても起死回生の名薬どころの騒ぎでない。

こうした穴は九段目にもある、山科の場で、祇園の茶屋での子から、雪の夜あかし朝こもり——と有て大雪の筈なのが、今夜は九太夫を殺し、加古川で水さう水、など、これは大とり込みの夜あかしだ、その間に雪の降つたけしきもない。

また、由良之助が、お輕の刀をしつかと持そへて、その言譯はこりやこもと、ぐつと突込む疊のすき間、下には九太夫肩先縫はれ七轉八倒——とあるが様の下にゐる者を上から見當誤たず突刺すとはさては由良之助透視術を心得てゐたか、こんなべら棒でべら棒であらぬやうな場面は、芝居といふものゝ隨所にあるものだ。

九 段 目

お石と本藏との取合せに、なげしに掛たる槍をつとり、突き掛らんずその勢ひ、戸なせぬ小浪も取さへる大騒動、此もさくさは始めから、力彌は内で聞いてゐる態になつてゐるのだから斯う六ヶ敷くならぬうちに取押へに出たらば宜ささうなもの。一方は母、一方は男でないか、何方に怪我があつたつて相濟まぬ譯、住居といふても下女のりんが一人で濟むやうな暮らし、まさか化物屋敷のやうなド廣い家でもなささう、何處の座敷に居たつて、此騒動が聞えぬといふのは腑に落ちぬ、推定するに今日四五十圓出せば借りられ相な家で、知らなかつたで濟まされまい。

十 段 目

天河屋義平は鹽谷家へ出入りの町人である、一方由良之助は家老、身分を論ずる時はその差お月様とすつぽんである、それに由良之助は、長持より出るが否義平に向ひ、手をつかへて、さてく驚き入つたる御心底——など、甚だ御丁寧な挨拶、浪人しても由良之助だ、敵打ちの駆引を萬端頼んだとて、出入の町人へ對し詞つきが、御念過ぎやしないか。

十一 段 目

さて愈々穴さがしも敵打ちの場まで行く。
その夜、丸竹に絃を張つて、雨戸と鴨居と敷居に挟み、一時に絃を切つて雨戸バタ／＼といやにやにつこい家造りもあつたもの、まるで郊外にやたらに殖るけふ此頃の貸家そののけでないか、元來この名案は、由良之助が遊所通ひの歸るさに、工夫を凝らした術だといふが、山科の隠れ家ならいざ知らず、いやしくき高師直の住居、賄賂を取つては、金にあかした普請だらう、それとも建築請負業者が、安上りに叩いたか、但は義士方の廻し者が、煙草ぶかく大

いに心得てやつけたか。

敵の御直を打取つて、位牌の前で焼香の折、第一番に矢間十太郎は、いかにも尤もな計らひだが、第二番に勘平の焼香は道理に合はぬ。

勘平は主君に對して、不忠はなはだしき者である、殊に敵打ちの晩に出合はず、山崎に犬死したる者でないか(事實の如何をいふのではない)彼を連判に加へたのは原郷右衛門と千崎彌五郎の二人が、彼の薄命を憫然と思ふて、死出の土産に仲間に入れた譯でないか、何で焼香する謂はれ因縁があるものでない。

これで忠臣藏を一端切上げる、まだ後ほどに忠臣藏に關してはお目通りするといひ、此邊で何か目先きを變へませう【筆者】

淨瑠璃文句穴さがし

繪本太閤記

二段目本能寺の場で、侍女しのぶの詞に

「去年の初春洛東の、地主のお庭の花ざかり、侍女どもにいざなはれ」

とあるが、これは京都東山、地主権現の櫻の盛りのことらしい、然し、初春といふのは、正月のこと、およそ花の盛りは立春より七十五日を以て時分とす、とは曆の上に明かなこと、正月に咲くのは、勿論舊曆であるが梅か水仙の室咲きばかりであらう。

たとへ、前の年が閏でも、正月に咲く櫻はあるまい、唐土では花といへば牡丹、成都では海棠を花といひ、日本では櫻を以て花といふ、とはものゝ本にもあるところ、この理屈から推すと、お庭の花ざかり、即ち櫻の花と思ふのが當然、大まけにまけて梅としたところが、正月お庭の梅を満開とさせるには、庭園を硝子張にして、温室としなければ納まりがつきにくい。

菅原傳授

寺小屋の段に

「よいともく上々吉、して連れて來たお袋は」

いふ源藏が詞、男が連れて來たやら女が連れて來たやら知らぬ筈の彼がどうして「お袋は」

といふか、さらに千代が言葉に

「めいどの旅へ寺入りとはや蟲が知らしたか」

といふ所では小太郎は、身代りになることを知らぬやうに聞えるが、後で松王が出て来て

「言附けてはおこしたれども、定めて最後のせつ未練な死をいたしたでござらう」

といふ、いひ聞かしてあつたことなら、千代が言葉の「蟲が知らしたか」は變、何も蟲が知らさぬでも知つてゐる筈ではないか此邊頓と合點が參らぬが、合點まゐらぬと詮議立てするは我輩ばかりか義太夫になる人々は何の氣もなく汗を流して唸つて居ればいゝ氣持らしいて。

本朝廿四孝

二の口は諏訪明神の鳥居前の段であるが、それは卯月の初め、御神事の宵宮といふことになつてゐるが、この日の夕暮れに、濡衣が百度參り、二の切武田の館になつて女の足で夜通し急いで戻つたものと見へ、ちやんと歸つてゐるのに、板垣兵部は簀作を駕籠に乗せて、怪しの辻駕籠をいさつさ、老ひの心もせき立つ足元——とすた〜いふて戻りながら濡衣よりは遙かに

に後で戻る爲めに、身替りの間に合はなかつた。

しかも兵部が簀作に出合つて旅宿へ連れて行くのは、濡衣が百度詣りするより先のことである。

尤も兵部が詞に、身が旅宿へ同道して密々話したい、殊によらばひまどらふ——といふて居るが、館へ連れて戻つた所で簀作が詞に、人に何のがてんもさせず、何やらよいことがある、おれ次第になつて居ると無理に駕へねぢ込んで、連れてござつたこのやしき——といふ様子では旅宿でしみ〜と長話したとも見えぬ。

又その旅宿といふのは何處か知らねが、籠かきの言葉では、上諏訪から十七八里、夜通しのはや返しといふ。

上諏訪と下諏訪とは何方が遠いか近いかわからぬが、下諏訪からは濡衣で女の足で夜通しで戻つたところを見ると、此方が近いらしい、夫なら古くからずつと簀作を連れて戻つたら、籠に乗せないでも、男の足できつと濡衣より戻れなくては理屈が合はぬ、何の用事があつて十七八里もある上諏訪へ參つたのか譯が少しも分つて居ない。

四の切、謙信の館で、勝頼が詞に、まことにけふは霜月二十日わが身代りに相果てし命日、といふが、二の口で濡衣が明神に百度参りしたは前にもある通り頃は卯月だから四月の上旬だ。その翌る月が勝頼切腹、しかも朝顔の咲く時分だが、全體朝顔が四月の初めに咲きますかいた鉢植の室咲きであるまいし垣根に満開は陽氣ちがひも甚だしい。

本朝二十四孝には随分と穴が多い。

勝頼が言葉にある霜月二十日といふのは一體何のことやら、四月の上旬に朝顔の咲いたのは前回に書いたが今度は霖月二十日が問題だ。

花つくりとなつて入り込みしといふ、その花は菊のことで、奥の華壇の菊の、かどむのを伸ばし、延びるのをちよめ、枯葉一枝ないやうに、残らず手入仕り——といひ、また關兵衛は白菊を持つて出るなど、始終秋の様子である。

尤も關兵衛の詞のうちに「時ならぬ菊を作るがお氣に入つて」といふ文句が一つ出てはゐるがそんなら彼女や下部が、こりや珍らしいとか、妙なことぢや位はいつてもよささうなもの何の變哲げもなく當り前に九月に菊が咲いてゐるやうな様子、變と思はず何としようだ。

そればかりか、考へても見る信州は、寒國、十一月二十日頃は雪が降つてゐること必定、なか／＼以て菊の盛りは至難中の至難事であらう。

まだある、侍女やはした女の詞には「お言號のあつた勝頼様は去年の秋御切腹」といふ、これぢや愈々もつて判り難くなる、そも／＼四月の初めに朝顔が咲いた時に切腹したのに、去年の秋といひ、又、霜月二十日が命日かといふ、一體勝頼の切腹は、春なのか夏なのか秋か冬か、如何に頭のいゝ人でも判断がつかぬではないか。

戀 飛 脚

新口村のところで忠三郎の女房は「これ女中さん飯が仕かけてあるほどに、出來そこなはぬ様にさしくべて下んせや」といふて出て行くのだがこれは一體何處まで行つたものやら、芝居の終るまで戻つて來ない、又頼まれた梅川も梅川で一度も釜の下など氣をつけた様子なく放つてある、大方この飯はビリ／＼とこげついて或は燃えて炭になつてしまつたのかも知れぬ、そんなことを心配してゐたらとても芝居など見てゐられぬが、そんな御心配はいらぬ、お世

話だといふならそれまでのこと、若し又、それがほんとの「まゝにならぬ世の中さ」と洒落のめされるなら、小生ぎやふんと参つてしやつぽを脱ぐ。

義經千本櫻

いがみの權太が、代官所へ上る年貢の銀三貫目——といふが勘當同然になつて、女房に水茶屋をさせてゐる者の年貢としては、餘り不都合ではないか、尤も母親をだます作りごとではあるけれど、母親も家の年貢がどれほどだか知らぬといふほどの奥さまでもない大抵は御存じでなければならぬ。

凡そ反百目にしても三貫目では三町に當る、だが、母親は子に眼がないから、何の氣もつかず幸ひ有り合した故に出してやつたものと見へる。

全體、この場は夜の狂言であるが、行燈もないとは思議、梶原が矢筈の提灯は聞えたが、門口へ置いて暗がりに這入つて惟盛の首受とるにたとへ内には灯があるにもせよ、別に燈を持つて改めて見さうなものである。

また吉野の鮫のすし桶といふものは大い深さが六寸ばかり口のさしわたしが五寸あまりの桶である、昔は大きかつたのかも知れないが、これでは人形の首でもなければ入りさうにはな

ら。

また、梶原が褒美の印において行つた陣羽織は袈裟と衣と珠數まで内へ縫ひ込んであれば定めしふくれてあつたであらう、もつとも鎌倉から仕立て、持つて來たのであらうが、此時權太が眞の悪人で身代りを用ひなかつたら、羽織の趣向は無駄になつてしまふ、間に合つたからよかつたが、これも餘り見越し過ぎた手まはした。

序の中、北峨嵯尼の庵の場は外は春めく物賣り聲——といふ文句で春二月頃の様子であるがその場から直ぐに若葉の内侍と六代君を小金吾武里が供して惟盛を訪ねて高野山へ志す、その道で、追手に出合つた吉野の里は榎の實のなる時分になつてゐるから、多分九月であらう、およそ半季の間も道中してゐられたと見へるが、京から高野までは僅に三十里少々ひまが要り過ぎる。

同じく鮫屋の場で、惟盛の詞に

「汝が討てかへりたる首は、主馬の小金吾にて、内侍が供せし譜代の家來、生て盡せし忠義はうすく、死して身代る忠勤あつし」

といふ文句を或貴人の聞しめしこの作はよくは出来たが、主馬の小金吾は僅三十歳にならぬ若輩の身で、代になき内侍公達を伴ひ、旅の憂ひをしのぎて介抱厚く侍づいたは甚だ以て神妙の至りである、だから生きて盡した忠義は薄いとはいひながら此處は生きて盡せし忠義も厚くと語る方がよいと仰せられたといふがさもあるべきことと敬服する。

同じく義經千本櫻の四の口、道行の文句に「弓手も馬手も若草を分つゝ行けばあたる雉子のハツと立」「霞の中のみかの原」「谷の鶯初音のつゝみ」「春の柳生の糸長く」「野路の春風吹はらひ」といづれも春の景色である中に「初かりがねのめうと連れ」といふ文句がある。

初雁は八月、二月は歸雁と決つてゐるもの、花を見捨てゝ歸る雁——などといつてある、するとこの一條、春と秋とのごつちや交ぜではないか。

知盛の詞に、大物の沖に當つて提灯松明一度消なば——といひ、又提灯松明星の如く——といひさらに、彌左衛門は手提灯をさげて小金吾の死骸に行當り提灯ふき消し首引つとげしとい

ひ、又矢筈の提灯梶原平三といふが、元來提灯蠟燭、傘の類は文祿の頃から始まつたもので、源平時代には無いと思ふ、却て松明を用ひし時代と覺えてゐるが、何の文獻によつてこの時代に提灯類を用ひさせたか大方の考證家にもお伺ひいたしたいものである。

二 代 鑑

立川の段で、秋津島が詞に、かたりといやかたりになつて戻さぬが當世——などは關取に似合はぬヤクな申分だ、世間並の斷りをいふておけばよいに、そんなことをいふから傷を受けるやうなことになる、庄九郎を見ることと、立たんくと子供の駄々のやうな振舞ひ、どうしても關取の貫目が缺ける様に思はれるが、どんなもんぢや。

戀 女 房

杏掛村で八藏が、

「與之助が布子の代りに己れが此どてらを賣つて」といふが、この時節には早く布子を着たも

のの見へる、といふのは景政が詞に「秋の日は短いな」といひ「風がせり出して寝られぬ」といふ、風のゐる時分だから夏かと思ふと火鉢がある、秋の日は短く、夜の長いものとばかりと思つてゐると、八藏が煙草一服のんで、脇差研いだ間に五時になつてゐる「鐘を聞けばはヤセツ」といふ景政が言葉から推すと、こりやまた日も短ければ、夜も日も短ければ、夜もまた短い、かう夜も日も短いのでは、どうしたら寝るひまがあるのかな。

お染久松

これは油屋の段

「お染久松たもとの白絞、此本がたしかな證據、おまへ間男しられても男が立ちますか」と善六がいふと源兵衛が「お染といふ名も久松といふ名も、世界に澤山な名ぢや、あの二人にかぎつたことぢやない、たとへこんな本が百冊でも清兵衛の男が立たんことはない」といはれて善六は引つ込んでしまふが、此時に清兵衛さん、お染といふ名もなるほど世界に澤山にあらうけれど、此本を篤くりと見なされ、聞いて鬼門の角やしき、かわら屋橋としてあれば、此方

のことかと思ひます！と一番善六がいひさうなものなのに、いはいでも大事なない「ちよいのせじや」とはべら棒な申分ではある。

妹背山

四段目の杉酒屋は七夕祭り、願ひの糸のおだまきに、引かれて来た御殿場は七月八日のことであるのに、蟻七は御殿間近くぼつかくと木綿の長上下で、いつも荒綱のどてら布子を着て出る、だから六月二十九日に茶の布子を着てゐる與市兵衛ばかりが寒がり家といふ譯でもない。

亦、突き出す鎗は篠薄といふ文句があるが、槍といふ物は貞和の頃に始まつた兵具で、入鹿は人皇三十六代の時の人、その間の年數に七百年ばかりの差がある、本来ならば是の時代は鉾を用ゐる方が至當、尤もさうなると蟻七の上下といふ奴が亦六ヶ敷い議論が起つて来る。

双巴

五右衛門内の場で、五右衛門の女房が五郎市に突かれてから「母と名のつく自らを殺してあの子が」といふが盗人の女房にみづからとは餘りに氣が強過ぎる、子も山姥のおもだか姫が「おりや泣くまいと思へども」といふ詞を使つてゐる「みづから」と「おりや」では大變な相違、女房餘り氣取るなよ——といひたくなる。

このほか随分と穴は多い、たとへば掲布染の四冊目官次郎の切腹に娘おてるが「五年十年おくれようと、かならず死出の由、三途の川の川ばたで待つて居て下さんせ」といふが、長い間を何も川ばたで待たなくとも、もつと工合のいゝ待合せ所がありさうなものでないか——などといつて穴を探してゐたら、淨瑠璃すべて穴ならざるなし、無益の穴さがしはやめにしよう。穴かしこく。

ところ自慢

お國自慢といふものは何處にもあるもの、これを大にしては一國の國民性となり、民族の自立となる、所自慢もよいが、過ぎると喧嘩になつた話も多い。

「何を贅六ツ」と罵倒したつもりでゐると「よしなはれ口さきばかりの江戸ッ子はん」など冷かされる。

こゝに江戸、大阪芝居問答といふ古いものがある、今日とは自慢の程度が大分違ふが、人情の機微だけはいつになつても變らぬものだと思ふ。

江戸「場の廣いこと六人つめてもゆつくりするは江戸の芝居さ」

大阪「さういひなはるな第一芝居の大きなことは江戸にはあるまい」

と、まア口火を切つたとすると負けぬ氣の江戸ッ子に、これも引いてはゐない大阪者だ、結局次のやうな問答となる

江「萬事のとりなり男ばかりですつぱりするは大阪にはあるまい」

大「男ばかりで景氣が悪い、南地幸町、新町の藝妓はんぶりの艶やかさ」

江「顔見世の飾り物は、しやぶつて見ることも出来まい」

大「看板の立派なことは眞似も出来まい」

江「役者の揃ふた三座は何うだ」

大「小さくとも芝居は五ヶ所ありますさか」

江「當世の新狂言は大阪ぢや見られぬえ」

大「見物が入り出したら大阪は永く續きまつせ」

江「番附の風雅さはどんなもんだい」

大「俗分りのする難波番附、女にもわかりやすいで」

江「菓子立派な山もりだぜ」

大「ほん下げ重のちんまりしたさまを見なはれ」

江「辨當わりこの氣前はどうか」

大「重はどうでも料理はこつち」

江「藝道第一、昔を守る唯し方」

大「藝ごとの人数は江戸にはあるまいて」

江「べら棒め、清元入りのいきな所作事杯あるまい、や——」

大「義太夫の面白味が分りまつか」

江「芝居茶屋の軒提灯の華やかさはあるまい」

大「二の替に立つ幟の數知れず兩側の染のれん、川竹の賑ひを御覽なりましたかい」

江「退屈のしない様に幕明きの早いは贅六には勿體ないね」

大「そんなこといやはりましたかて、道具立ての立派さは敵ひますまいがな」

江「何いつてやがるんだい、江戸藝はうつつけた上手、着附けの妙は分るまい、八代目なん

かの藝が大阪にあるかい」

大「我童、延三の評判を聞きなはりましたかい」

X

こんな調子で止め度がない、結局いふことが段々に無くなつたら、氣の早いを自慢の江戸ツ子が、いきなり拳骨で勝負を決しやうも知れぬ、先づ以て、此邊の所で江戸と大阪の自慢はお預かりとして、次は上方同志、京と大阪との問答に移らう。

京都と大阪、關西の同志討ちである、名所、名産の自慢の鼻高々とやるところであるがこれを歌の形にして行こう。上の句が京都方で下の句は大阪方が附けることとして見やう。

先づ京都方は

すめらぎのいともかしこき宮所

と京の御所を自慢したとおぼし召せ、すると大阪方は

他國にはない大阪の城

と、大阪城をもつて来てどないなもんやとやつたものだ、以下みなこの調子である。

◎神々の集まり給ふ吉田どの 四天王寺は佛法最初

◎初午は福で賑はふ稻荷山 十日戎は金銀の山

◎有がき葵祭りの雲上さ 舞樂の調子残す天王寺

◎京女郎衣裳比への御忌詣で 見たかひがんに参る女中を

◎華やかな四條河原の夕涼み 春は賑ふ猫間ほり川

◎目さましき矢数は三十三間堂 火かけ見ごとな天神祭

◎又外に類あらしの山さくら 天保山の風景を見よ

◎涼しさの風をおり出す御影堂 長町團扇風もどつさり

◎智恩院宗旨も花の惣本寺 世に住吉は船神の玉

◎田樂の音もなまめく二軒茶屋 卯の日参りの新家華やか

◎山鉦に祇園囃しの拍子よく だんじり太鼓音も勇まし

◎大阪に似合はぬ襟の涎かけ 京はかづきで値切るやき餅

◎やさしきは花の宮古路國太夫 義太夫ほどに聞くところなし

◎島原の角屋に及ぶ座敷なしと 九軒の揚屋目を驚かす

◎風俗は眞似もなるまじ京人形 南地で見せる大戸からくり

◎圓山は都を一目千疊じき 浮瀬ほどに酒はのめまい

◎たて花の水上清き池の坊 今も薫れる海花津の梅

◎京鹿子はやり小袖の染模様 うつほ鹽物さこは魚市

◎餘念なう空也念佛の踊かな 神をいさみの住吉をどり

- ◎参詣はいつも絶へせぬ本願寺 千石船の出入り數百
- ◎澄切つた水に育ちし京の町 自由に渡る川々の橋
- ◎法華經を九重の地に布と聞く 六萬體をうづむ石佛
- ◎有難さ嵯峨のお釋迦のお身拭 善光寺の火の消えぬ和光寺
- ◎綾錦京羽二重は司なり 米の相場は大阪が元

江戸時代の禁止好色本

筆禍の元祖

形式こそ違へ發賣禁止といふものがあつたことは今も昔も變りはない、では日本最初の筆禍者は誰であらうか？ 文筆の爲めに禍ひを招いた者は奈良平安中古各朝の時代にも可成あつたらうと思はれるが、今其正確な記録がないので知るを由がない、が最も古い筆禍者は小野篁であらう。仁明天皇の承和四年、小野篁は遣唐使の乗用船について藤原常嗣と争つたが大ひに憤慨して病篤しと稱して遂に乗船せず、西道謠なる書をもつて遣唐のことをそしつた。圖らずも之が嵯峨上皇の忌諱にふれ、その罪を糺されたが、遂に仁明帝になつて其官職を免ぜられ隱岐に流竄された。

之は嚴正の意味で發禁とはいへないが筆禍には相違ないから、先づ發禁の嚆矢と爲すべきであらう。

それ以後に到つては枚擧に遑ない程ある。左に逐次その年代、筆者名、著作物名と判明した丈の制裁の刑名を列擧することゝしよう。

○惠心僧都「往生要集」永觀二年

○藤原通憲「安祿山の事實」二卷天治元年(斬首獄門)

○木曾大夫房覺明「平家之糟糠武家之塵芥」の文忌諱に觸る 治承四年

○釋源空(法然上人)「選釋本願念佛集」建久五年(版木燒却)

○藤原光親 後鳥羽上皇の爲に北條義時討伐の詔書を代作す 承久二年(斬首)

○日蓮上人「立正安國論」文應元年(流謫)

○釋圓月「日本書」曆應元年

○虛無無一左衛門 落書 永祿十二年

江戸時代の發禁

慶長以後初めて版刻の技術が廣く傳はるやうになると共に、長崎から泰西の文化が輸入され學者著述家等も夥しく輩出し、従つて書畫の刊行物も頻出するやうになつた。それにつれて幕府の政策的の禁遏を受ける者も非常に殖へた。

殊に寛永年代に於ては切支丹宗の書籍の發禁が夥しかつた。その數凡そ百種に上つたであらう。次には豊臣家に關する刊行物である。家康は實に慘忍酷薄忘恩の惡辣手段を廻らして豊臣家を亡ぼし、自ら將軍職につくに及ぶと自家防衛及び世間を韜晦する爲に極力豊臣家に關する刊行物に暴壓を加へて苛酷の重刑を課したのであつた。これ等の刊行物には「古狀揃」「朝鮮征伐記」「太閤記」「繪本拾遺信長記」「繪本太閤記」「御代の若餅」等でも出版ルの中には斬首の極刑に處せられた者すら數人ある。次に幕府の忌諱に觸れたものは尊王思想を含んだ刊行物で、苟しくもそれらの匂ひのあるものは極端に危険視し、會つての田中内閣の共產黨暴壓にも等しき大壓迫を加へた。尙且つ自家の安泰と消極的な鎖國を守る爲に、政治、兵術、

武器、地理、其他學術的新智識に關する刊行物は凡て禁止して、國民をして飽くまで盲目たらんめんとするやうな愚かな手段を執つた。それらの厄に逢つた書籍としてはかの有名な山鹿素行の「聖教要録」を初めとし

「日本人物史」「舊事本紀」「道本記錄」「太宰府天滿宮故實」「大學或問」「諫書」「人國記」「方程論」「非火葬論」「東國平記」「赤城義臣傳」「扶桑名勝圖」「天學名目」「萬寶餘傳」「本朝醫考」「關白排除の封書」「紅毛談」「田沼意次傳記」「天神七代記」「三國通覽圖說」「海國兵談」「懷中道しるべ」「近江八景圖」「北海異說」「日本沿海實測圖」「算法便覽」「琉球年代記」「扶桑名考」「海外事情」「夢物語」「海防臆測」「見はてぬ夢」「天朝無窮曆」「江戸繁昌記」「伊豆七島全圖」「蠻語箋」「海外新話」「異人恐怖傳」「時勢策」「安政見聞誌」

等で、之等の刊行物は寛永七年より安政三年に到る迄であるが、其他未だ幾多の書籍が同じ厄に逢つてゐる。大體書名を一讀した丈でも、幕府當局に如何の無定見無智であるかが窺へるがその餘りに臆病にして神經過敏なる態度は笑止といふより惘然たるものがある。

ところが、以上述べた以外の理由に依つて發禁になつた刊行物がまだ、夥しくある。それは即ち好色本の禁止で、現今の言葉でいへば所謂風俗壞亂の發賣禁止である。實はこの方が筆者の述べんとする主眼點であつたのである。——然し本文に入る前に、一寸、當時の筆禍者及出版元に對する幕府の制裁處罰の方法及刑名を述べることにしよう。

發禁刑罰制度

徳川幕府の發禁刑罰制度は、單に「民をして知らしむべからず」の標語を主としたのであるから、別に明らかな法文は發布されてゐなかつた。その理由は勝手な御都合主義で臨機應變にやつたものである。そして、是等の處理は三都の町奉行、所司代又は各藩に於て行つたが、罪狀によつて、著者のみを罰したこともあれば、出版元のみを罪したこともあり、又は兩者を處罰したこともあり、或は絶版の處分のみで、著者及出版元には何等の刑罰をも課さなかつたこともあり、區々で一致してゐなかつた。

しかし、著者又は出版者に對する刑罰は大體左の何れかであつた。

- 死罪(首を斬り落す、遮人に處する刑名)
- 切腹(自刃せしむること、俗に詰腹といふ、士分に限る)
- 獄門(町中引廻しの後、斬首し、其首を臺にのせて梟す)
- 流罪(遠島に處すと同じ、伊豆七島、其他遠國に放つ)
- 追放(江戸、京、大阪等にて市外へ放逐すること、重追放、輕追放の別あり)
- 江戸拂(江戸十里以内に居住せしめざるをいふ、大坂三郷拂も亦同じ)
- 闕所(動産不動産を全部官に沒收す、身上半減の闕所といふのもあり)
- 閉門(門戸を閉鎖し、晝夜本人及び外人の出入を禁ず、期間は二十日以上百日以下)
- 押込(閉門に同じ、但し門戸を只閉め置くのみ)
- 預(罪人として大名に預け、一家を禁錮せしめる、幽屏、蟄居も亦同じ)
- 籠舎(揚屋入とも稱す、牢獄に禁錮する、永牢とは終身禁錮)
- 武家奉公構(武家に奉公するを禁じ浪人たらしめる)
- 手鎖(自宅にあらしめて三十日、五十日、百日等の間、瓢形の手錠をかけさしむ)

- 過料(過怠罪として納むる料金、即ち罰金金額は三貫文以上二十貫文以下)
- 敵(重追放の附加刑、答にて尻を五十度或は百度打つ)
- 叱(單に「叱り」と「急度叱り」の二種あり、譴責して放免すること)
- 著者又は出版者が以上の刑罰に處せられた時は、其版本は悉く絶板とされた。
- 絶板(版本及び印本を押收して破毀又は燒棄して、爾後賣買を禁止す)

禁止春本淫書の數々

「江戸時代に於て軟派物で絶版になつたもの、嚙矢は、先づ『古今四場居百人一首』であらう。此書は浮世繪版畫の祖菱川師宣に私淑した鳥居清信の筆に係る珍本で、元禄六年夏五月開板、初め「芝居百人一首」と唱し、當世の人氣俳優百人を小倉百人一首に擬したが、時の書物奉行協部甚太夫から沙汰があつたので「四場居色競」と改題した、然しその後再び町奉行能勢出雲守より發賣を禁ぜられ、版元平兵衛は輕追放に處せられた。本書一部は安田家で藏してゐたが先年の大震災で烏有に歸し、現在では残る一部が帝國大學圖書館に所藏してある。

次は元禄七年の「吉原草摺引」であるが、之は稍好色本に近い、繪入半紙本六冊で、吉原遊女の評判記である。これより以前、寛文、延寶の時代にはこの種の書はいくらか出たが、此書が禁止になつた以後、即ち元禄六年より寶永の初めに到る迄の十餘年間は當局に遠慮してかあまり出なくなつた。著者、版木師、版元は何れも牢舎申付けられ。

然し一方春畫好色本は當時取締令のなかつた爲めに盛んに刊行されてゐた、そもく春畫好色本は寛永時代から行はれたもので、寶永正徳の末まで好色何々と題したものが多く刊行された。斯かる好色本を幕府が看過してゐたのは一應不審の様に思はれるが、それは人民の心をその方面に向けて士氣を癡痺させて、幕府存続の基礎を永からしめんとする一流の政策から出たものに他ならなかつた。が、餘りの淫本の跳梁は如何に自己存在に波々たる幕府としても目に餘るものがあり、又對世間へ氣兼ねもあつて、遂に享保七年十一月左の如き好色本禁止令を發布するに到つた。

一唯今迄有來候板行物ノ内好色本之類ハ風俗之爲ニモ不宜儀ニ候間段々相改絶板可申附候事當時、著書者及版元の實名を署して公然と賣買してゐた好色本は此時悉く絶版となつた。中

には井原西鶴著貞享元年出版の「好色二代男」を「諸艶大鑑」同三年出版の「好色五人女」を「當世女容氣」元禄元年出版の「好色盛衰記」を「西鶴榮花話」と夫々改題し、好色の二字を削り去つて絶版の厄を免れたものである。

此好色本禁止令と同時に、諸種の出版取締令も發布された。

その後の禁止好色本としては次の如きものがある。

○西川祐信「百人女藤品定」繪本 享保八年

○作者不詳「娘評判記」讀賣 明和六年

此讀賣といふのは現今の新聞紙の代用で、火災、地震、洪水等の天變を初め、男女の情死、畸形兒の出生、祭禮の番付、仇討、處刑等の最近の出來事を一枚或は二枚粗末な版木刷にして讀賣したもので、幕府は貞享元年及享保三年に之を禁止したが、尙密に禁を犯す者があつた。これは當時の娘評判記を賣つたのである。

○栗本兵庫「明和伎鑑」明和六年 遠島

○山東京傳「仕懸文庫」「錦の裏」「娼妓絹瀧」寛政三年 著者手鎖版元財産半沒收

この三種は所謂菟蕪本で「仕懸文庫」は鎌倉時代の大磯遊廓の狀態を寫すと記してあるが、實は江戸深川の岡場所の描寫である。「錦の裏」は青樓畫の世界を寫し「娼妓絹漣」は娼妓を將棋に擬した趣向で、金銀を使ふ客にもかまはず横にゆくは女郎の實と卵の角道等といふ洒落題目がある。

○式亭三馬「辰巳婦言」寛政十年

辰巳即ち江戸深川の遊里に於ける妓女の痴態を寫した菟蕪本。

○鹽屋艶二「南門鼠」寛政十二年

江戸品川の遊女及遊客の狀態を寫した菟蕪本。

○成三樓酒盛「婦足禿」享和二年

淫猥な菟蕪本。その一節「堪忍しておくんなんしと例の殺し目尻でにつこり、此時の顔、うちへ歸つても、立つても居ても、寝てもさめても、ちら／＼見ゆべし、これより咄いたつて低くなり、何か聞へるやうで、聞へぬやうなり云々」とある、推して知る可しである。

○式亭三馬「阿漕物語」後篇 文政十年

風俗壞亂のことであるがそれらしい點は見當らぬ。第一卷に「近國より美面うるはしき女とさへ聞く時は、人の妻娘の嫌ひなく強奪し來りて房臥の伽をなさしめ、飽くときは或は殺し或は海に沈め、又はその胸を割きて人膽を取り、許多の黄金に換へ云々」とあつて、其掠奪して來た多くの美女を深山の岩窟中に於て左右に侍らせる所の挿畫がある、又第四卷中に「重廣は日頃の望み足りて亂菊の前と晝夜枕席を共にして、玉芝道人がいましめを忘れ、今け妖術も用ゆるに足らずと、大ひに驕慢の心おこり、たゞ淫酒に耽り、酒池肉林の奢はものかは、朝夕亂菊と共に樂しみを極め、更に鎌倉勢を防ぐべき用意もなかりける云々」とあるに過ぎない之を幕府が風教上に害があるとして絶板を命じたとは思はれない、或は「東鑑」に據る鎌倉時代の物語とはいへ、實は當時を諷刺したものと認めて禁止したのかも知れぬ。

○爲永春水「春色花見舟」其他 天保十三年

春水には有名な「春色梅曆」を初め「春色辰己の園」「春雨日記」「春色惠の花」「春色戀の白波」「梅の春」「春告鳥」「春色籬の梅」「春色田舎の花」「春の若草」「春色玉兎」「春色霞の紫」「春の月」

等多くの人情本があるが、何れも晦淫小説である、その後天保十二年出版の「春色花見舟」によつて十二月捕へられ、版木五車程を押收され、春水は手鎖、板元は過科錢各五貫文、他に賣上金七兩を徴された。

○柳亭種彦「修紫田舎源氏」「水揚帳」天保十三年

「田舎源氏」は源氏物語を根柢として時代を近古にとつて潤色したもの、徳川大奥の状態を寫せるものとして大歓迎を受けた。「水揚帳」は本書本である。

○歌川豊國「奥女中若衆買の圖」年代不詳

若衆といひ野郎といひ「かけま」といふは男色を賣る美少年であるが、此かけま茶屋は芳町湯島、芝神明等にあり男女の客を迎へたが天保九年十二月幕府は之を禁止し、尙又之等の風俗畫の出版も禁止された。

幕府の禁令はその發布後二三年間勵行するのみで、次第に弛緩しその隙に乗じ舊に復して如何がはしいものが跋扈するので、天保十三年六月四日、再び繪草紙人情本等取締令を下し、俳優妓女等の一枚刷繪錦の賣買、合巻繪双紙の繪組に俳優の似顔狂言の趣向を用ひ、或は表紙

上包に一切色彩を施すことを嚴禁し、更に七月には人情本の賣買貸借を禁止し、書肆所藏の書冊並に板木一切を沒收した。此禁令の結果、天保十四年にはさしも隆昌を極めた彩色繪表紙の合巻物及人情本は一冊の出版もなく、僅かに藍摺表紙の教訓的讀本が數種出たのみであつたが、その後例の如く禁令の勵行は漸次弛み、弘化の年末嘉永の初年頃には、又舊の如く彩色繪表紙ものが多く出るやうになつた。

以上ほんのアウトライン乍ら、江戸禁止好色本に就て述べ終つたと思ふ。(終りに本項は宮武外骨氏の「筆禍史」に據る所大なりしことを謝して置く)

死靈のたたり

毎晩うなされる

今時、こんな話しを持ち出すと恐らくは大多数の人達が、そんな莫迦なことをと頭から否定し去るに違ひない。

なぜならば、此類の多くの嘶が其處に必ず科學的な説明が下される餘地があり、そして世の中に事實見たといふ者は、見ないといふ者より遙かに少數で、且つまた自分が實見しないといふことが、勢ひ問題をさういふ風に考えさせるに甚だ好都合だからである。

けれども更によく考へて見るとこれ等の論據は何れも決して積極的な否定論といふことは出ない、見たものが少數であり、そして自分が見ないからといつて、事實世に存在しないとは

いへないし、科學的な説明の餘地があるといつても、たゞ餘地があるだけで、確實にそうたとは断定出来ない。して見ると世の中には「死靈の祟」といふ様な事實が必ず無い、とはいへないのではなからうか。

何れにもせよ、筆者がこれから物語らうとするものは、實に筆者自身にも何う考へて良いか解らぬ不思議なものゝ一つなのである。

今から十年ほど前、私の妹が十八九歳の頃であつた、私達は本郷から父の勤先の都合でY市の郊外のK町に住むで居た、そして私達が其處へ移轉して間もなく妹が得體の解らぬ病氣に罹つたのであつた、いや病氣といへばいへぬことはないが、事實は病氣ぢやない、たゞ毎夜一定の時間になると激しくうなされるので、いはゞ睡眠不足と食欲の減退から自然病人となつたのである。

身體は見る／＼衰弱し、ものゝ一週間経つか経たない内に見る影もなくやつれて、長い間の大病人かと思れるほどであつた、人間も物と心との兩方面から攻めつけられると全く弱いものである。日頃はなるほど一寸したことにも直涙を見せるといつたふうなかなり神經質なそして

優しく見える部分もあつたが、表面に現はれて居る性質は、そんな悪靈かなにかに惱まされて毎晩魘される様な陰気臭い娘ではなく、どちらかといへば明るいむしろお転婆とも思われるほどの氣の勝つた質の方であつた。

だから妹があんなことの爲めに病人になつてしまふなんてことはどう考へても合點のゆかぬ話だつたのである。

布團へのしかゝる黒い影

それで私達も、はじめの内に、妹のことに就ても別に大して氣にも止めて居なかつた。——たぶん一寸した神経の狂ひで同じ様な夢を毎晩見てゐるにちがひない、殊に年頃の娘だから、ことによると、身體の調子が狂つてゐるのかも知れぬ。要するに簡單な神経作用なのだから、寢床でも變へて見たら良からう。といふ様なことで、至極あつさり考へてゐたものであつたところが、日數の経つにつれて目に見えて瘦せ衰えて來るし、食事はだん／＼その分量も減つて、五六日経つ内にはすつかり本物の病人の様な格構になつたので、家の者も多少は眞剣に

考へなければならなくなつて來たのであつた。

で本人によく聞き訊して見ると魘される時刻は必ず十二時を打つて間もなくだといふ。どんな夢を見るのかといへば、夢ぢやない、時計の音も聞えるし、障子の棧も、襖の模様もハツキリと見える。それで居て、何者ともなく、丁度黒いボーツとした影の様なものゝ時刻になると何處からともなく出て來て、布團の上に大磐石の如くのし掛る。

その呼吸苦しさ、そしてその恐ろしさ、妹は大聲を立てゝゐる心算なのだといつてゐた。尙も彼女のいふ所によると、それが何者であるかは分らないが、判らないながらも、心の何處かでこれは死人に異いぬといふ確な意識があるとのことだつた。そしてそれだけに本人は日毎に恐ろしい脅迫觀念が高まるのであつた。

私はこのことを聞いて、魘される形式はまことにありふれたことだと思つた。なにも形式がありふれたことだからといつて莫迦にする譯ではないが、自分達が時として魘される場合とは同じ様な條件だといふことは、その後間もなく自分達が平常に復したといふ事實に顧みて、妹のことについても幾分かの心頼みにもなつたのであつた。

けれどもその何とも知れぬ怪物が妹に「死人だ」と心の隅にハッキリ感ぜられることだけは、なんとなく薄気味の悪い點であつた、が然し、これも考へ様に依つては、當人の強迫觀念からだともいえると私の解釋は斯んな風であつた。けれどもたゞ困るのは、だん／＼妹の病氣も激しくなつて、少しも快方に向はないといふ事實問題である。で私は何によりもこれは氣分を轉換せしめることが第一だと考へて、夜は無論のこと、日中でも努めて彼女の傍らに居て、常に面白さうな氣分の引立つ話——などをして聞かせたのであつた。

死人が憑く

ところが、私が斯ういふ風に仕向ければ仕向けるほど妹は反對に氣を滅入らせて、時としては雑談の最中に「兄さん、世の中に死靈なんて本當にあるんでせうか？」と突拍子もなく訊いたりした。

「莫迦なそんなものがあてになるものか」と叱りつけると、彼女は「いゝえ、私はどうもあると思ふの、兄さんが本當に私の爲めに考へてくれるなら、神経などいはないで、早く私に憑

いて居るものを引離す工風をして下さい、いゝえ私には屹度死人が憑いて居るんだわ」と涙ぐむでいふのであつた。

私はその時、口先では重ねて激しく、叱り付けて置いた様なものゝ事實私の神經論は、まことにその効果に乏しかつた。現に夜になると、私ばかりでなく、家中の者が妹を中心にして呻される時刻まで賑やかな雑談をして、父などは、酒の勢ひで追ひ飛ばせといひながら、あまり好きでもない酒を傍らに置いて、景氣を添へたりしたのであつたが、その時刻になると、矢張り駄目だつた。

怪物は、その酒の席にまで飛び出して來ると見えて、刻限が近づくと、妹は急に四邊りを見廻して聽ていきなり母にしがみついて、五分ばかりは手の着け様がない迄に恐怖する、そしてその揚句は、見るから痛ましいほど疲勞する。

私達は、しまひには時計があるから時刻が妹に分るのだらうと家中の時計を止めてしまふといふ様なことをして見たが、妹は頭の中でチャンとその時刻を知つて居た。で、ホト／＼困つてしまつた私達は、この上は家を移轉するか、妹だけ別な所へあづけるか、私の案は一つに一

つであつた。

父も私の説に半ば同意を表してそれにしても兎も角も知り合の神経系統専門の醫師へ行つてよく相談して来ると、ある日の朝勤めを休むでわざ／＼東京へ出掛けて行つた。

すると、母は母で、叔父に話しをして、何處かで一度占つて貰ひませうと、女は女らしい考へから、これも朝早く出掛けて行つた。私は小さな女中と二人で家に残ることになつた。

お岩様が来る

確春も相當深くなつた頃だつたと思ふ。庭の櫻も蕾をふくらませて、陽がボカ／＼と心持ちまく座敷に射し込み、これで心配ごとさえなくば世は實に長閑な春だつた。

私は病人の室から鍵の手になつて居る居間で、その春日を浴びながら新聞を擴げて居たものだつた。すると「お湯を」と云ふ病人の、か細い苦し氣な聲が耳に入つた。

で、フト病人の室を振返ると、見るから痩せ細つて、青白い顔に何んともいえない不愉快な表情をしてゐる妹が、寢床から脱け出て來たらしく、椽のところから此方に向いて立つてゐた。

心なしか全で亡者の様な弱り方だつた。

「どうしたんだ」

私は詰問的にいつた。すると妹は口元に僅かな微笑を浮べて

「お湯を下さいな」

と聞とれぬ位な聲で返事をした。

私はその微笑が決して愉快な時にする微笑ではなく、むしろそこにある絶望的なのが宿されて居るのを直観して心中なんとなく不安だつた。で、直ぐ女中に湯を持たしてやつて

「一體どうしたの？」

と改めて穩かに聞いた。

病人はその時再び露骨な不愉快な顔付に還つた切りで、私の質問には別に返事もせず、縁先へ首を出して、頻りと令漱をして居た。そしてそれが済むと、珍らしいことには鏡臺を女中に日當り良い所へ持ち出させ

「兄さん、私もう駄目よ」

とはじめて口を切つたのであつた。

「莫迦な。何にが駄目なんだ」

「でも、私、今いやあな夢を見たの、晝間からあんな夢を見る様になつては……もうとても駄目だわ」

病人は首垂れたまゝ悄然と座つた、それで居て、とき／＼後を何事か注意する様だつた。私は、その様子を見て、妹がまた何にか脅かされたと思つて日中だけにかへつて無氣味にもなつたが、何によりも彼女が哀れで仕方がなかつた。

で私は、直ぐ病人のところへ行つて「つまらないことを考へるんぢやないよ。みんなお前の神経なんだよ」と慰めをいつた。けれども彼女は、もうそんな慰めなどは聞きいれなかつた。「淋しさうに頭を振つて「私もう諦めて居ますわ」といひながら次のことを話し出した。

「今、うつら／＼して居ると、玄關の格子の開く音がして、誰れか入つて来た様に思つたんです。何んだか、叔父さんらしい、と思つて居ますと、その後の襖が開いて入つて来たのが、矢張り叔父さんだつたんですわ、ところが、兄さん！その叔父さんがどんな格構をして来たと思

つて？

ヒヨイと見ると、それが芝居のお岩様そのままぢやないの、つまり、叔父さんがお岩さんの格構をして病氣見舞に來てくれたのよ、まあ厭な叔父さんだ。なんだつたあんな格構をして來てくれたのだらう、と思つて居ると、美枝子、病氣はどうだといつて、枕元へ座ると、いきなり私の口を押へて、長い舌でペロリと口の邊りを嘗めたんです、いやだあ！と思つたけれど、もうその時は大きな聲を出す勇氣もなくなつて、あゝもう駄目なんだ、私も、もう／＼死ぬんだと諦めて、凝つと眼をつぶると、そのまゝ叔父さんのお岩さんは見えなくなつてしまつて氣が付くと矢張り夢だつたんですわ、けれどもそれで居ながらこの鳥の聲が矢張幽でしたが聞へて居たんです」と妹は椽先の鳥籠を仰ぎ見た。

氣魂しい叫び

彼女は話しをして居る間もまだ多少周囲を氣にして居る様であつたが、話し終るとすつかり諦めて居るやうな風が見へて居た。私はたゞ極力妹を慰撫するより外に方法がなかつた。

その内に屹度良くなるから、自分から先づ精神を緊りしなければいけない。何獲、敗けるものかといふ、踏む張りが必要だ。若し此の家が嫌なら、僕も一緒に行つてやるから、何處か賑やかな病院でも入つたら……ともいつた。

妹は「賑やかな病院なんて、そんな病院はないわよ」と微笑んだ。私も思はず我れながら無器用な慰め言葉に苦笑したのであつた。

聽て妹は鏡臺へ向つて「あまり汚いから髪でもとかしませう」と瘦せた顔を兎角して鏡に映して居た。

「まあ随分やせたのね」

「その位は病人では當り前だよ」

「死ぬのは仕方がないけれど、またなくなるのは嫌ね」

「まだそんなことをいつて居る」

「だつて……」

「まあ良い。髪をとかすのは良いが、くだらん心配をするぢやないぞ」

私は病人の神経を尙鋭くさせる鏡などを持たせたくなかつたが彼女の心も察して、かういつて居間の方へ戻つて来た。そして机の前へ来て座らうとすると氣魂しい妹の叫び聲が突如として耳を貫いた。なんとも名状することの出来ない悲痛の聲だつた。

私は殆どバネ仕掛の人の様に飛あがつた。その時、妹は縁側からのめるやうに庭先へ轉がり落ちるところだつた。私は夢中になつて、駆け寄つて直ぐ妹を抱き起すと、彼女は殆んど人事不省ともいふ状態でグツタリして居た。

そこへ女中や、近所の人達が飛んで来てくれて、いろ／＼と應急手當をしたので、妹はやつと意識を回復した。幸ひと怪我は少しもなかつたが、彼女は殆んど死人の様な相だつた。私は妹の顔をちつと眺めて居ると、春淺くして既に人生を終らうとする妹のために涙が溢れてくるのを止めることが出来なかつた。

易者の占ひ

晝過ぎて母は息せき切つて歸つて来た。そして「美枝子は」と直ぐ訊いた。母は母で何か重

大な不安を胸の底に湛へて、その上に幾分の安心を見せる様な面持だったが、不在中の出来事を詳しく話すと、眉を擡めて、深く考へて居るものゝ様であつた。

「どうしたんです」

「占つて貰つたんだがね」

「何處で？」

「叔父さんの所へ行つたら、そんなに氣になるなら、兎も角も占て貰つたら良からうつて普門さんの處へ一緒に行つてくれたんですが…何んでも大變よく當る坊さんだといふ評判でした」

「で……」

「それがね、死靈の祟りだといふんだよ……」

母は一段と聲を潜めていつた。

「フム……」

母は私が考へ込むでしまつたのでそれを取なす様に

「だけど、もうチャンとお祈りを上げて貰つたから、これで大丈夫だといつて下さつたんです

よ

「……」

「今晚からは屹度安眠が出来るといつてたんです……が」

「然し、今晚どころぢやない。晝間から此處ふうぢや……」

と、私は不服だつた、母も折角の喜びが、どうやら水泡に歸したらしいので、唇の不安に嬰はれて居るものゝ様であつた、私は、なまじ坊主が餘計なことをいつたのを腹立たしくさへ思つた。

「死靈の祟りも糞もありやしない、皆なしてそう考へるから尙更いけないのだ」

母には氣の毒だつたが、私はハツ當り氣味に不平を洩らした。

「ぢき叔父さんがあとから来るから、もう一度よく相談して見やう」

母はいひ譯らしくいつた。美枝子は、一眠りしてどうやら眼を覺ましたらしい。私は母に占つて貰つたなどを病人の前には堅く口留して二人で病室へ入つていつた、其處へ丁度叔父もやつて来て三人は妹の枕元へ鼎座した。

妹は案外元気で、叔父に夢のことを自分から話し出した。私はその元気が既に彼女の諦めから来てゐることを知つて居るので一しほ不惑だつた。叔父は終始重く背きながら病人の言葉を熱心に聞いて居た。そして話しが一劃りつくと彼れは「美枝子もう大丈夫だ、今晚からはゆつくり寝られるよ」といつた。

その言葉は流石に重々しく自信に満ちて、相手の心を動かすに充分だつた。が美枝子は、矢張り「駄目よ」といつて初め取り合はなかつた。が思ひ直したらしく「どうして？」と聞き直した。そこで叔父は私達には頓着なく、今日占つて貰つた一切のことを露骨にぶちまけてしまつた。

「さういふ譯で美枝子、普門さんはその死霊も、もうこれでお前からは離れたといつて居るんだ。私達の前ですつかり祈禱してくれたんだ。あの人のいふことには間違ひはないよ、なんでもお前は何處かで餘計なものを見たに違ひないといつて居た。そんな記憶はないかな」と、今度は母の方を顧みて「ねえ姉さん」とその同意を求めた。それを聞くと妹は急に緊張した眼を輝かして

「私もなんだかさういふ氣がして居るんですの。兄さんは無暗に神経だといふけれど、決してそんなことはないと思ふわ」

といつた。然し、何か見たかといふことに就ては、知らない。或は知つて居るかも知れないが想ひ出せないといつて居た。

「なんでも死霊の祟りといふのは、無關係の者でも祟ることがあるといつて居ましたよ。お前の様に祟られる様なことはしなくとも、その人の口を借りて、世間に知らせて貰ひたいときによくさういふことがあるんだとさ、考へ出せないかね」

母も最早隠して置く必要もないので、たゞ一生懸命に妹に思ひ出させ様と努めた。

「坊さんのいふには年寄だといふ話しなんだが……」

「さう〜お爺さんだといつて居ましたのね」

母はかういつて、叔父の合槌を打つた。その時、美枝子の顔は見る／＼恐怖におびえて

「いやだあ……」

といきなり母にしがみついた。

死靈の言葉

「ど、どうしたの、美枝子、しつかりおし」

母は妹をひしと抱きしめ乍らいつた。

妹は母に抱かれた儘、眼を据へてチーツと空間を見詰め乍ら、何かいひ度さうにしきりに唇をわな／＼顔はせた。

伯父も私も固唾を呑んで妹の顔を見守にた。いつもの妹とは全て顔が異つてゐた。

「わしは……」

その時、妹の咽から別人の様に雑枯れた聲が洩れた。

「え、どうしたの、何かいひたいことがあつたら早くおいひ」

母はおろ／＼して妹の顔を覗き込んだ。

妹は再び言葉を吐いた。

「わしは……北海道で漁師をしてゐました渡邊作藏と申す者で此の冬海へ漁に出て死にました

が、縁戚とてない一人者ですから誰一人供養もしてくれる者もありません、それ許りが只一つの心残りでございます、で、縁もゆかりもない此方のお嬢さんに移つてお願ひに上つた譯ですが、どうぞ私の先祖代々の墓が Y 市 S 町の多聞院にございますから、恐れ入りますが、わしの戒名をつけて經の一つなりと上げて頂き度うございます、どうぞお願ひ致します、それさへ叶へて頂けたら安心して成佛致します、此方のお嬢さんに憑いて大變お苦しめたことに何とも申譯ございません、お詫び致します、では、呉々もお願ひ致します」

といひ終つたかと思ふと、妹は總身の力が抜けてしまつたやうに、グツタリと母の腕に凭れた。見ると。その顔は眞蒼で額にビツシヨリ汗を掻いて、ハア／＼と喘いでゐるのだつた。

あまりに意外な言葉と、普門さんの豫言が凄いほどの的中したことに、皆の者は暫し顔見合せで言葉もなかつた。

妹はそれから如何にも快ささうにグツスリと熟睡に陥つた。皆も之でどうやら不安が一掃されたので吻として明るい顔に返つたが、たつた今眼の前に見せつけられた神秘を思ふと薄氣味悪くてならなかつた。

翌日から妹は不思議にもケロリとして治つてしまつた。

S町の多聞院へ行つて渡邊作藏なる人の戒名をつけて貰つて、懇ろに回向して貰つたことは
 しままでもなす。」

歐米奇聞珍聞切抜帳

筆者のスクラップ、ブックから外字新聞に現はれた奇聞珍聞を御紹介しよう。

色 魔 業

大戦後歐洲列國の風紀が頹廢してゐることは、世間熟知のことであるが、數年を経る現今、國民の性的生活が圓滿を缺き、職業としての戀愛人が多く出沒してゐるさうである。つまりきたない言葉でいへば「女タラシ」である。夫の無い婦人數人と結婚を約し、出来る丈金錢物品を捲き上げ、姿を晦ますのを業としてゐる輩である。又「雇はれ戀人」と稱する職業もある、之は一週間なり一ヶ月間或女の假の戀人となり、その女の今までの戀人に見せつけて厭氣を起させる役を勤めるのである。これらの輩は多く歐洲の遊覽地の舞踏場に入出し、夫無き婦人を捕へるのを普通の方法としてゐる。下はオサン君より上はやんごとなきあたりまで、この種の

輩に犯され金品を失ふ者が少くないと、伯林の一新聞は警告する。

ユーゴーへの戀文

ユーゴーに送つたデユリーエツト、ゾルーの戀文が、此程巴里で競賣に附せられたが、一八三三年から一八八三年の五十年間に書かれたもので、その數一萬五千通、一萬八千フランで落ちたさうだ。

一萬圓か貞操

「母は病の床に臥し薬を買ふ金なく死に臨んでゐる、此時一萬圓を以てあなたの貞操を蹂躪しようとする者がある。あなたは母の病を癒す金を得る爲に一萬圓を望むか」
右の質問が、合州國オハイオ州のキツテインバーグ大學心理學教授レイモンド博士に依つて女學生六十五人に試みられた。四十五人は自分の貞操より一萬圓を取ると答へ、残る十五人は母を見殺しにするも貞操を賣らずと答へた。各々の理由は想像の範圍にあることだが、此數が面

白。

花嫁賣物四千圓

合州國モンタナ州のシコードといふ女は左の如き廣告を出した。

病める両親と八人の兄弟を養育する爲に私の身體を四千圓で賣ります。結婚證を得ると同時に同額の小切手を下さる方を望む。

愛する女の皮を表紙に

一三年前死んだ佛蘭西のアンゼ伯爵夫人の肩はこよなう美しいものであつた。英國の皇帝エドワード、皇子ウエールスは、夫人の肩にキスをしたとさへ傳へられてゐる。夫人は生前、かの天文學者、詩人フラマリオン博士を深く慕つてゐた。夫人が逝く二週間前その枕邊に博士はゐた。夫人の口からこんな言葉が洩れた。

「私はもう駄目です——いつぞやエージン・シユーの宅を訪問した時（巴里の神秘）と題する

本が、人間の皮で表装されてゐるのを見ました、その皮は彼の愛人のものでした。私もあなたの本の表装にする爲に肩の皮を贈ります」と。

夫人は亡くなつた。博士の許に夫人の遺志通り、肩の皮が、醫師の手によつて贈り届けられた。それには、夫人の死後第一に出版される博士の著書の第一冊に表装して貰ひたいといふ文意の手紙が添へてあつた。

博士の「天と地」といふ著書にその皮が使用され。その本の背には「死の記念」の金文字が輝いた。此博士も間もなく亡き數に入つてしまつた。巴里で有名なキイファーといふ製本屋主人の談によると、秘に女の皮で製本してゐる者が少くないと。やがて、ひそかに戀人をアルコール漬にする者も現れるだらう。

露西亞の結婚

露西亞では結婚離婚とも手続きが簡單なので一年に六人の妻と結婚した、つまり五人の妻と離婚した男等がある。最近制定された結婚法の第十八條にかう記載されてゐる。

「夫婦間相互の若しくは、そのいづれかの希望により、終生、結婚を取消すことを得」

結婚したいお二人さんは手を組んで役場へ出かけて料金を拂つて署名して書留めて貰へばその時から天晴れ夫婦でございます、それで一ヶ月夫婦でゐて共白髪までゐてもそれは二人の勝手、もし、男でも女でもその結婚した歸りがけに今の相手よりもつと好きな異性を知つて、それと運よくか悪くか相談がまつまれば、その足で直に廻れ右をして、もう一度ニールブルの料金を拂つて手續すれば、五分前の新妻（又は花婿）と離婚成立、再び書留め料を拂つてお次と夫婦となれる。この結果、出生率が非常に高くなつて、現在歐州で最高を示すに至つた——といふ。

女の極樂新露西亞

紐育新聞モスクワ特派員の報によれば——現在のロシアは女の天下である。彼女等は斷髪、これも従來のオカツバ程度でなく男子の如く短く、中には前で綺麗に分けてゐる者もある。甚しいのは全然剃つてゐる。膝を現はす短いスカート、男のやうな上衣、靴下に草鞋、中には素

足の儘といふのが、プロ婦人の制服で、烏打帽を横に被り、普通の女帽子はブル魂を示すものとして排斥されてゐる。赤いハンケチで鉢巻して自由の赤き婦人を誇る。而して街路、劇場の廊下、何れにあるも、何れの時でも、好むがまゝに喫烟し、四辻に立つて大聲を立て、政談演説をやらかさうだ。——日本のモガ連も一つ見學に出かけては如何？

羞恥を去れ

露都モスクバに、唯一枚のエプロンのみ、他は素裸で街上を横行する氣まぐれ者の男女の一團が現はれた。肩から赤いリボンをかけて、それに「羞恥を去れ」と書いてある。市民は取押へて警察へ引渡した。警察ではこれらの猿のやうな人等を、猿、黒狸々を飼ふ檻の中に一週間禁錮した。

ひとがた

人形——是は「にんぎよら」と讀んでは不可ない「ひとがた」である。人間の肉體を構成す

るものは何と何との物質である。もしこの物質を科學の力で完全に死後もその儘保存出来るとしたら、そして人間の考へ方が死人の靈々尊敬するは迷信に過ぎず、牛や豚を食べる如く、生存人のお役に立しめようなんといふ、現在としては亂暴な考へ方になつたとしたら、死人を如何に使用するか？この問題に就いて米國にゐた或男はこんな想像をした。烟草や鹽を政府が專賣してゐる如く、死人は政府の專賣となし、こゝに人形專賣局が設けられ、デパートメントストアの一室に人形として陳列販賣される。人民は身分相應な人形を買つて自宅の押入れに藏つて楽しむことが出来る。男は女の人形を金持の未亡人は高價なバレンチノの人形でも、貧乏な男は一箇十圓位のカフェー女給の人形を買へば宜しい。

もしこんな時代が來たら結婚難は忽ちどころになくなる。又不景氣なんてことはおかしい夢となる。

それから、それから利益はうんとうんとある筈だ。

この「人形」に就いて、その男は委細な發表をしてゐるが、こゝに譯載出來ぬを憾みとする

外國の魔窟

亞米利加では辻君の多いのに驚く、黒ん坊まで出る。亞米利加には公娼といふものがない。皆私娼である。彼女等の借りてゐる室又は特約のホテルへ行つてからの様子は記述する自由は有しないが、日本人の私娼が桑港にだけ三人許りゐる。

桑港のバーバクコーストのあたりには無料の活動寫眞館があつて、中に入ると活動の立見である。その間に幾多の私娼が傍へ寄つて来て誘ふ。誘はれる儘に従へば、端にあるバーで酒類といつてもアルコールのないものを飲ませられる。黙つてゐれば、給仕がどんく運んで来る。百圓位の高には直ぐ上る。それから本芝居の交渉になるのだが、初めてのものは大抵此酒場で怖くなつて逃げてしまふ。

部屋へ連れられてから、魔酔薬を飲まされて、醒めて見たら戸外に褌衣一枚になつてゐる自分を見出したなんといふ話は決して嘘でない。無情なこと氣味のいゝ程である。

又部屋で二人喃々話しをしてゐる最中、女の情夫が飛込んで来て脅迫するをんでことも少く

ない、所謂美人局だ。

市俄古あたりでは女の持つてゐる部屋も立派だし、お湯位は使つて歸れるそうだ。

要するに亞米利加は貧しい旅客には極めて不行届な此種の歡樂境のみしかない、然し金持が個人の住宅で、野獸的な歡樂は、恣に行はれてゐる。

それが巴里だと追がだ。巴里はカフェーの町淫賣の都會である。少し厚化粧の女だつたら此種の女だと思ふして間違ひはない。此方面に對する警察は無干渉のやうに見へる。或極めて野獸行爲を見せる家の前に巡查が立つてゐる。誰が入つても何とも咎めない。尤も干渉が八釜しかつたら巴里はいや佛蘭西は亡びてしまふだらう。

公娼もゐる、中に入ると、お抱への娘子軍が半裸體で列を組んで客の前へ現はれる。しかし美人は存外少い。

カフェーは逆も愉快だ。藝術的カフェーといはれる少數の場所の亂雜亂舞、奔放、身動きもならぬ程詰つた人の中に、モデル女と畫家達は、各々一尺四方位の中で踊つてゐる。

踊り場では、女のゐない國へ行つて見たいと思ふ程女を見せられる。いふ所によると、之等

の女は、佛蘭西人ではない、他の歐州人ださうだ。

英國でも極力さういふ。ピカデリー街あたりを出没する女は、英國人ではないと。亞米利加でもさういふ。夫々民族的自尊心で以て辯解するのだらう。

日本人の此種の女はいかに淪落しても、可成羞恥と人情を落さない、之に反して毛唐の此種の女になると、これでも人間かと思ふ位薄情になり切つてゐる。それは女性の器關に對する觀念の相違から來るのであるまいか？後者は頬や耳や其他の同じ器關として考へてゐる。だから味も素氣もない。

だが、大膽で露骨だから、それを求める者にとつては申分はあるまい。

結婚俱樂部

巴里に「グリーン・リボン俱樂部」といふ團體がある。これは俱樂部員同志の交際から戀愛から結婚を媒介する目的を持つて生れたものである。

誰もが知つてゐる如く、かの大戰以來、佛蘭西は結婚しようとする婦人が、結婚したいとい

ふ男の數に比して多過ぎるやうになつてしまつた。小兒の出産率は減少する一方で國の心配は種々の方法をとつて、出産を奨励してゐる。出生兒幾人に對して金其他特別の保護を現在行つてゐる。

戦前に比して結婚期の男子の數は少いとはいへ、機會を得ないで、まご／＼してゐる男女の多いことは、いふ迄もない。けれども之等の男女を如何なる方法で、好ましい方法で一緒にしようかと考へられた。

最初の案としては、結婚期又は結婚を望むの男女は鈕の穴に緑のリボンを結びつけ、僕は又は妾は、結婚したい者である、ごさいます。といふ意志表示をした。そして之を結んだ男は、結んだ女に對し、名前を問ふことを許し、又、女から男に交際を求めるを無禮としないことにした。けれども、之は直ぐに具合の悪いことが分つた。先づ、リボンを結ばない男女は、途上車中等でリボンの男女を揶揄の様に見、耳打ちし、冗談を言つた。ので、氣まりが悪くなつてリボンをつけない様になつた。次に話しかけた男が、かけられた女にとつて、好ましからぬ場合に、女は困らざるを得なかつた。それらの不便の爲、折角の考案を、うまく行はれず愉快

なお茶話として終つてしまつた。

茲に於て生れたのが「グリーン俱樂部」である。これは時々大舞踏會を催して結婚を望む男女會員を集めるのである。そこから戀愛が生れ、結婚といふ本能形式を執るやうになることは火を睹るより明らかなことで、俱樂部の目的には達せられるのである。けれども不良な分子が舞踏會に出入することを恐れて、俱樂部員たる時、極めて面倒な方法を執つて選んでゐる。そして正直に結婚を求めてゐると認められた男女文が會員となることを承諾される。

それから、舞踏場で舞踏といふことになる。

場内に入る時、各自番號札を渡される。場内は片側は男、片側は女と別に並んで立つてゐる。お互ひに眺め見渡しても宜しい。そして誰でも好む者を相手に踊る。舞踏中如何なる内證話か交はされるか、相手同志しか知らない。お互ひに意向があれば、お互ひの番號を告げ合ふ。

知つた番號は何處の誰であるかは、事務所へ行けば、記録紙を見せてくれるからチャンと分る。それから後は舞踏をそつちのけで戀愛を語る。その夜直ぐ婚約の成立するものもあれば、半年位戀仲となつて通ふものもある、知名の士の多くが賛助員として名前を列ねてゐる。

歡 樂 船

禁酒國である北米合州國は紐育灣の沖合十二哩の所に五千噸長さ二百八十五呎許りの汽船が浮んでゐる。マストには合州國屬國キューバの國旗を翻してゐる。一體如何なる種類で船であらうか？

此船へ行くには船賃往復百五十圓を要する。然しこの船は此汽船に直屬するものに限り他からは一切使用することは出来ない。船から船へ乗る時には、舷門入場料十圓を取られる。さて、一度中へ入れれば上甲板には六十の客室あり、下甲板は舞踏場、食堂、トランプ室で、その前後部が酒場となつてゐる。酒場には世界各地如何なる種類の酒でも取揃へてある。但しお値段の儀は、三鞭酒二本で六十圓。善美を盡せる客室の方は一泊十圓也。夕食は十圓、祝儀は僅か十圓ださうだ。

食堂には海軍服を着た佛蘭西人の女給が侍り、黒ん坊の女が手傳つてゐる。

船の名は歡樂船。客はいふ迄もなく歡樂の獵人、豪商、役者、女優、未亡人、何んでも上記

の船賃と舷門入場料を拂へば乗船の権利を與へられる。

踊り且り飲み疲れたら甲板の籐椅子に體を横たへて、燦たる燈影、大洋のうねりを照らすを眺め、潮風に流れる舞踏場よりのジャズを聞くもし、三鞭のグラスを舉げるも御意のまゝである。

要するに治外法權である十二哩沖に浮べる酒池肉林の船が之である。右は合州國の一富豪スプールの計畫を樹てた歡樂船株式會社で資本金二百萬圓。冬季になると避寒地フロリダ州バルム海岸に碇泊する。

日本人歐米人の雜婚獎勵

有名な人種學者である華盛頓州立大學教授キンケート博士は「日本人と歐米人は精神的乃至その他の方面から見ても優秀な人種を作り上げるべく非常に異り過ぎてゐないから、雜婚はよい結果を見るであらう」と發表した。

相撲總まくり

大男の記録

相撲とりを指してありや人間の出來損ひだ、といへば一方ではうんにや、日本人だつて昔は皆大きかたんだ——といふ。

なるほど、古事記には景行天皇の御身の丈一丈二尺とあり、日本記には日本武尊の御身長一丈とある、然しこれはどうも物尺の單位が今日のとちがふのだといふ説もあつて確とは相分り申さぬ、物の記録から推しはかつて見ると、いかにも古代の日本人はいまよりは總體に大男であつたと思はれる節がある、それにしても、力士と名のつく者は、並一通りからずば抜けて大きかつたものらしい。

「相撲大全」とか「活金剛傳」といふやうなものから、さつと抜いて見ても

鬼勝象之助 七尺三寸

石槌島之助 六尺四寸七分

山嵐獄右衛門 六尺六寸七分

御用木無次右衛門 六尺四寸五分

大木戸團右衛門 六尺四寸

兩國梶之助 六尺一寸

西國市太左衛門 六尺四寸

菅谷勘四郎 六尺三寸五分

卷尾曾津之助 六尺二寸七分

窟林左衛門 六尺二寸

相引森之助 六尺二寸

細石唼峨右衛門 六尺一寸五分

秋津島浪右衛門 六尺一寸八分

吉野川團右衛門 六尺二寸五分

谷風梶之助 六尺三寸

阿蘇ヶ嶽桐右衛門 六尺二寸

金碓仁太輔 六尺四寸七分

大碓灘右衛門 六尺四寸五分

西國森右衛門 六尺三寸七分

大矢島新左衛門 六尺三寸

箕島十太左衛門 六尺二寸七分

大山次郎右衛門 六尺二寸

北國官太夫 六尺二寸七分

楯ヶ崎浪之助 六尺二寸五分

杉の森長右衛門 六尺二寸五分

- 丸山權太左衛門 六尺三寸七分
- 荒瀧音右衛門 六尺二寸
- 源氏山住右衛門 六尺二寸
- 四ツ車大八 六尺二寸
- 大鳴門淀右衛門 六尺四寸
- 手柄山仁太輔 六尺三寸五分
- 緒之山浦右衛門 六尺二寸五分
- 磯碓平大輔 六尺二寸
- 九紋龍清吉 六尺九寸三分
- 釋迦嶽雲右衛門 七尺一寸七分
- 里見山丈右衛門 六尺五寸
- 大岬丈右衛門 六尺二寸
- 六空武左衛門 七尺二寸五分

- 生月鯨太左衛門 七尺五寸
 - 鈴麻山鬼一郎 七尺一寸
 - 武藏湯伊之助 七尺餘
 - 鷲ヶ濱音右衛門 六尺三寸
 - 士蜘蛛塚右衛門 六尺五寸
 - 大砲萬右衛門 六尺五寸
 - 太刀山峰右衛門 六尺餘
 - 駒ヶ嶽國力 六尺餘
- といふやうな譯だが、これ又古いものになるとどの程度まで信じられるものか、實は記録も五寸や五寸の相違があるのだからあぶない。

看板力士

由來、大きなものを讚美し、これを歓迎することは人間の通有性である、殊に打算といふも

のが権力に押し潰されてゐた古代では、洋の東西を問はず、いかにバカ氣たる大きさが、打算を超越して造り成されたか、ピラミッド、万里の長城、まづその見本のやうなものである、そこへ行くと、人間はいくら権力でも金力でも、努力でも大きく造らうとして容易に造れるものではない、だから何うした拍子かに大きく生れたものが歓迎され崇拜された、殊に相撲道の隆盛になるにつれて、その風習は益々盛んとなつた。

然し相撲は力の世界であり、技の境地である、いかに圖體ばかり大きくとも技と力とがこれに伴はなければ、角道に於ける日の下開山と折紙をつける譯には行かぬ、早い話が近代の大男出羽ヶ嶽文ちゃんにしても、若し圖體だけでいけるものなら横綱なんだが惜いことに、まだ力が伴はぬ。

そこへ行くと昔は、かうした大男を相撲興行上の政策に使用したもので大男を賞美する一班の好奇心を満足させる爲めに、大男は、只その圖體の立派さだけで土俵入りをさせたものである、實際は相撲を取るのではなく番附面の看板だけ關取格にして置いて、土俵入りを餘興につとめさせたものらしい。

からなると、何でも構ふことはない、巨大な體格を見せ物にすればよい譯なので、現在東京博物館にまるで歌舞伎十八番の「矢の根」に五郎が用ゐるやうは大煙管が陳列されてある相撲がその煙管の用ゐる主であつた生月鯨太左衛門なども、看板力士の方で、身長七尺五寸、體量四十五貫目、十八歳で土俵入りをしたといふが、角道通の人の調べたところによると、彼は平戸の産、平戸侯からその圖體の偉大さを稱讃され、わざ／＼生月といふ名まで貰ひながら實は相撲はさつぱり駄目で、あはれや見せ物の土俵入りを相つとめたゞけで二十四の歳に瘡毒で死んだとは、餘りに味のない出来損ひ男ではある。

片 輪 力 士

かうした見世物土俵入りが流行すると、調和のとれぬ人間即ち出来そこなひの方が客の好奇心を呼ぶといふことになり、大童山文五郎なんて、八歳の子供を土俵入りさせた、この子は十一歳になつて二十二貫あつたといふから片輪と申すべき部、神通力國吉なんて年七歳で二十貫目、これまた土俵入りして番附面だけは何れも幕内の待遇なのだから、角道の爲めに苦々しい

沙汰とされ、明治になつてからは廢止された、とはいふものゝ田舎廻りになると弊風はまだ續いて明治も半頃までこの見世物土俵入りがちらほら残つてゐたといふことである。

角道通の横井鶴城氏の研究によると、歴史的根據のある日本一の大男といふのは、文化の頃に、やはり土俵入り力士であつた牛股武左衛門といふ男で、身長七尺六寸、體重五十二貫、まづ以て空前にして絶後の大男であらう。

彼は肥後國上藤城郡白糸村大字戸の上の生れ、顔の長さが二尺二寸、手首より中指迄一尺二寸、足袋の長さが一尺四寸、腰の廻り八尺一寸、兩手を合せると米が一升三合入つてその掌に墨を塗つて半紙にあてると拇指と第五指が外部に出たといふ。

この大男の評判が大守のお耳に入つて、それは一つ見物しようといふことになり呼寄せた、その時下された衣類の着丈が六尺二寸、袖二尺三寸酒食を興へよとの上意があつたから、まづ酒三升と米五升を基本として料理を整えたところその三升の酒をべりり平げ、五升飯の半分を食つた、一尺五寸の鯛三枚、内二枚を刺身、一枚をあら共に煮たのを残らず平げて

「どうだもう少し——」

といはれた時、牛股は甚だ神妙

「暴食は毒だと父母から申附けられてありますからこれでやめておきませう」と、なるほど彼の身の比例からすれば、この位は食を慎んでゐる方なのだらう。

太守はこの大男が殊のほか氣に入つて、何かと力業などさせて喜んでゐたが或時大きな牡牛を跨ぎ越したので、爾來その方牛股と名乗るべしとの上意、さてこそ牛股武左衛門とは相名乗つたが、徒らに大きいだけで小膽者の意氣地なし、興行價值だけあつて力士としては名をなさなかつた。

非職業的力士

すまふ取りが力自慢の話は随分と多い、世に知られたるもの、知られざるもの、講談などに漫談、漫談化されるまで、力そのものが、殆ど滑稽化されたものさへある、それ等のお話は後まはしとして、こゝに、相撲とりでない相撲の話をつつ三つ紹介いたさう。

宇多天皇と申せば人皇五十九代の至尊にましますが、帝いまだ東宮に立たせられなかつた頃

お力自慢におはしましたが、某日後の天下の色男の標本となつた在原業平に相撲を一番望まれた。様子が「世継物語」にある、その勝負の決は明かに記されてゐないが、御椅子に打ちかけられ、高欄折れにけり——とある所から察するに、どうも帝の負けらしい、業平ほどの色男も昔は金も力もあつたのかも知れない。

源平盛衰記には「西の宮殿にて、敏延と満仲と相撲をとりけるに、満仲力劣りて格子に投附けられ、顔を打缺きなり」といふ一節がある、これは冷泉天皇（六十三代）の時のこと、多田満仲と橋敏延の餘戯のことであるが、この爲めに負けた満仲はカツとなつて腰刀を抜いて敏延を突かんとしたが、敏延もさるもの、高欄の張木を引抜いて寄らば殿らん身構えをしたので、こは一大事マア〜といふ様な引止め役が出て、先づは無難に引分けられたが、こんな話は他にも大分ある。

比丘尼の大力

力持の女の記録では小田原のえつといふ女が、荷物を山積した牛車が崖に轍を外していつか

な動きさうになく、村人が多数出かけて大騒ぎをやつてゐる所へ通りかゝつた彼女は、につこ
と笑つて牛車も荷物ともろとも軽々と持ち上げて、如何でござる——といふ様な顔つきでさつ
さつと行き去つたといふことがある、巴板額などの女勇士のことはあまりに世間に知れた事實、
こゝに相撲としての女について「嬉遊笑覽」に比丘尼のことがある。

頃は文祿年間のこと、相撲があるといふから人々は、どんなにかめしい男どもが出るかと思
つてゐると「年の頃二十許りなる比丘尼なり」と先づ人々を驚かせた、ところが此相手になつ
たのは關取の立石らしく彼は「何だ、こんなへなくした者ども、十人、二十人束になつて來
ても一つまみの力も要らぬ」といひながら、何もこんなことに自分の出る幕でない、若い小相
撲でも相手に出しておけ——といふや比丘尼の見暮が恐ろしい。

「いや〜取るほどならば勸進元にて上相撲を出し給へ、左なくば取るまじと申す」こんな譯
で立石が少し中腹で立合ふこととなり、彼は何處からでも突くなり、引くなり勝手にせい——
といふ面構へで大手を廣げて構へたところ、比丘尼はつと突つ掛つてこれを仰向けに突倒して
しまつた。

これはいかねと立石、今度は油断なく身構へたが、比丘尼つと寄れば立石弓手のかいなを取り、三振ばかり振りければ、比丘尼は後臈を追取つて伏せさまにぞ投たりける——とある、随分強い女もあればあつたものである。

相撲で係争解決

やかましくいふならば、相撲の起源に就てなどは立派な博士論文になる位の價値は充分あるかも知れぬ。然し今それを詮議立てすることは我輩のやるべき仕事でない。それに大略のことは諸君も既に御存知のこと、むづかしくさへ申さなけりや、相撲の起源は、まづ武術の力比べから發達したもの、といふ程度で差支へなさうである。

この相撲をその後いかに利用したか、いはゆる見るだけの相撲でなく、賭けるだけの相撲でなく、相撲一番の勝負によつて大きな係争を解決したことが「太平記」にある。」

それは文徳天皇の第一皇子維喬親王と第四皇子維仁親王との皇位繼承問題が起つた時のことである、種々な事情があつて容易に決しないので相撲の勝負で決めることとなつた、そこで、

維喬親王の方には紀名虎、維仁親王の方には伴善雄といふことになつた。

名虎は維喬親王の外祖に當つて位は左兵衛佐、年は三十四、身體は肥大、身長七尺餘優に七十人力であつた。

ところが一方善雄の方は少將で年二十一、小男で力も普通、とても名虎の相手はつとまり相もない貧弱さだ、そこで勝敗の數は取組まんでも分つたこと、勿論やつて見ると善雄は危く負けさうになつた、此時、維仁親王の方に隨いてゐた延曆寺の惠亮和尚が、不可思議なる祈禱をさしげ爐壇に立てたる劍を以て自らの頭を突き破り、腦を碎いて芥子を入れて香の煙りに燃やして念じたので善雄はその様に俄に力づき、名虎を投げ倒して維仁親王が御位に即かせ給ふた、清和天皇がこの御方である。

力 自 慢

何うも之は當になるか、ならぬか疑問だが、尻子十勇士でお馴染の山中鹿之助は生れて一月経つと歩き、二月目には物を食ひ、八歳の春には敵を討ち——これが殆んど天下御免の通り相

場となつてゐるが、眞實こんな状態だとすると、今日ならば生物學の參考であり、奇蹟でもあ
る、この鹿之助十三四になると好んで相撲を取り既に身の丈七尺六寸、五人張の弓を樂々と引
いて、その力幾人力あるか知れないといはれた。

太平記には畑六郎左衛門時能といふ武藏國の住人が關八州に敵するものもない強力とあり、
妻鹿孫三郎といふ播磨國の人がこれはまた日本六十餘州に敵なしとあるが、それならこれが日
本隨一の力持ちかと思つてゐると、後三條天皇の御代に豊後の日田鬼太夫といふのは身長八尺
餘、然も強力無双「日本一の大力と勅免の繪旨を下賜せらる」とあれば、勅によつて折紙つけ
られた此方を日本一としなければならぬかも知れない。

これは講談の方だから勿論あてにならぬ——といつては講釋師どのから苦情が出るかも知れ
ぬが、畠山重忠が「岩を千切つては投げ、千切つては投げ」といふ言葉がある、彼重忠が最後
の奮戦に刀折れ矢盡きたので、今度は岩を千切つて投げつけたといふ、岩を千切るほどの力と
すればこれまた日本一どころか世界一と申さねばならなくなる。

これ等の力士はみな相撲を好んだらしいが、こゝに相撲取として日本最初の横綱とされる明

石志賀之助と並んだ兩國棍之助この兩國がある日相撲を終つてから或家に行く、當時大關の
一人であつた御用木無次右衛門が風呂に入つてゐた、これは農家の野天風呂らしく、そこへ道
り合せた牛を曳いた男が、その風呂が邪魔で通れないので關取何うかその風呂を除けて呉れと
嘆願したので、御用木は風呂から出やうとすると、行き合せた兩國が、それには及ぶまいと御
用木が入つた儘風呂桶を傍らに取除いたといふ力自慢の餘談がある。

安政元年の正月アメリカの黒船が渡來した時、幕府ではこれに食糧を積み込むことになつた
ところが、何せ黒船で脅かされて内心實は癪にさはつてチリ／＼してゐた折なので、何かな一
工夫と考へた揚句が、この食糧積込みに相撲を使つて、一つ毛唐人に日本人の力の強さを示し
てやらうといふことになつたらしい。

その時の記録に「アメリカの始めて横濱に來りし時、米を遺さるとて力雄を選ばれ、米菴を
運び入るに、力雄なれば二俵も三俵も一度に持ち運ぶ中に、白眞弓と名のる角力、極めて力強
きが背に俵四つを負ひ、胸先に二俵をかけ、左右の手に一俵宛さげ、すべて八つの俵を持ち運
びけるにぞ、異國人も膽つぶれてほめたゝへ候ふ」とある。

この白眞弓といふ力士は飛驒の生れで、子作の時から身長大極めて強力、數々の力自慢話を残してゐるが、江戸へ出て相撲とりとなつたのは二十歳の年、その時身の丈六尺八寸六分といふ大男だつたので、これも矢張り見世物的の土俵入りをやつたが、その強力を恐れられても至つて鈍感で技これに伴はず遂に三役には進み得なかつたらしい。

しかし米人の膽を冷すには非常に役に立つたもので、しかもこの米俵は五斗俵だつたといふから、都合八俵の目方は約百五十貫、普通に、人は自分の目方だけのものは背負へるといふが彼の體量は四十貫と稱され、自分の目方の約四倍のものを荷負ふ力を持つてゐた譯である。

酒仙徳さん

九升飲んで家出

その男の名を假りに徳さんとしておく。

徳さんのことをいふ前に、一寸徳さんの親父のことを話しておく順序がいゝ

徳さんの親父はT橋のT町で旅人宿を営んでゐた。町では一流の宿屋で、可なりな財産があつたらしい。ところが此の徳さんの親父は、宿屋の商賣の方など、放つたりしておいても、お客は勝手に来て、勝手に歸つて行く、といつた調子だつた爲め、商賣の苦勞に頭を悩ます必要はなかつた。

「あの町なら、あの家に泊る」

旅人のすべては、まるで申合せをしてゐるかの様にT町に來れば徳さんの家へ泊つては歸つて行つた。

そんな風だつたから、徳さんの親父は至極氣樂に、好きな酒を朝から引つかけては、冗談まじりにお客にお世辭でもいひながら、帳場格子に納まつて居ればよさうなものだが、そんなことをしてゐられない一つの大きな仕事があつた。

仕事といふのは、まるで武勇傳の講談の何かにあるやうに、徳さんの親父さんは、どうした譯か柄に似合はず、ほんとうに柄にもなく擊劍が好きだつたのである。

若し相手さへあるなら、徳さんの親父は朝から晩まででも、竹刀を握つてボン／＼やつてゐたいほど、擊劍と來たら好きを通り越して、まさに淫に近かつた、どうせ劍道の先生では飯の食へぬ御時世になつてゐる、それも今日のやうに劍劇大流行、やれ阪妻が天下の劍聖だの、河部が劍劇の大王だのと持て囃される時代とも相成つたら或はこれ等の劍劇大王たちに、餘りに無茶でない劍法の型でも教へる役目ぐらゐ有つたかも知れぬが、その當時に於ける徳さんの親父の擊劍といふものは、町の人々が蔭口たゝいたやうに、腹ツ減らしのほかに、何の用にも

ならなかつたものなのである。

しかし、そんなことを構つてゐられるほど、徳さんの親父の擊劍といふものは、あだや、おろそかの代物ではなかつたのだ、そして好きこそ物の上手の諺の通り、よほど腕前も上つてゐたのだらうか、それとも相手が餘りに弱かつたのか、その邊の所は知らぬが、或日T縣知事の前に於ける晴れの劍道試合の日、彼は見ごとに幾人かの敵手を登して、T縣下第一の劍人となり済ましたのである。

たゞでさへ劍道にかけたら、ちとキ印じみてゐた徳さんの親父である、いまや晴れの試合にT縣下の劍客を皆殺しにしたとあつては彼の得意や思ふべく、それだけで既に徳さんの家に何か大變動が起らずに済む譯がないといかことは、コケな論理學者だつて推理するに難くはないましてや賢明な讀者諸君は、直ぐに一大事出來！と思ひになるでせう。

しかるにだ。

然るに、いつもかうした場所で、何が一場の訓示といふやうなものをしなければ、年俵のお手前だけでも義理が済まぬことに出來上つてゐる知事閣下といふ類の人類は、徳さん一家に

まさに來らんとする小事些事などを考ふるの閑のありやう筈はない。大所高所、閣下の立場から、この日の勇士、徳さんの親父に、親しくお盃を下しおかれて

「我が縣に於ける武道の將來のため、ますく精進努力、大いに竹刀、木刀をふり廻されるやう」

といふやうなお言葉を多分に吐かれたのであつたらう、知事閣下としては當然であり過ぎることであつたが、餘りに當然でなかつたのは、徳さんの親父である。

彼はまつたく手の舞ひ足の踏むところを知らず、只管感激、只管恐懼して天晴れ名譽の人として我家に歸つたのである。

さア、事は面倒になつてしまつた、徳さんの親父、家内中を呼集めて今日の試合の有様を審さに物語つた揚句は、祝へやくで飲み出した、飲んではますく嬉しがり、嬉しがつては飲みした。飲んだだけ、喋舌つただけでことが済めば多少家内中の迷惑だけで済んだのだつたがさて徳さんの親父、竹刀を取り出してヤツと氣合もろ共、殴つたのでも斬つたのでもない、ヤツこらさと肩にかつた儘、すたこら飛び出してしまつた切り、何處かへ武者修業に出たのか

以來行方知れずとなつた。

あとで計つて見ると、この夜徳さんの親父は飲みも飲んだり、一斗樽の底には、びちやくと五合ばかりが残つてゐるだけ、まさに九升餘を飲み干してどこかへ行つてしまつたのである。一人、一夜に九升を呑んだといふ記録は、日本酒呑みレコードの中には澤山はない、斗酒なほ辭せず、とは大酒の形容詞の如き感があるが、徳さんの親父は、岩見重太郎や荒木又右衛門のやうな劍客であつたと同時に、大杯傾けて平然たるそれらの人々とその點では相一致點があつた。

それはとにかく親父の家出で、青くなつたのは徳さんである。

歸らぬ親父

酒を飲んで泰平樂を並べお面だ、お小手だと夢中になつてゐた親父ではあるが、徳さん一家にとつては、ともかくにも大黒柱である。

目先きに邪魔になつてゐるからこそ、無い方が有るに優つたやうに思つてはゐたものゝ、偕

て姿を消されて見ると親である、探したいは人情、一家の主人である何かと不便も生じて来る
爾來、徳さんは親を尋ねることに、殆どその全生命を注ぎ込んだ。

あらゆる手段を講じた、徳さんはまるで、此世の中に親探しの爲めに生れて来たやうなもの
だつた、家業どころか或場合はほんとうに寢食を忘れて親父を探し廻つた。然し、竹刀を肩に
してぶらりと出た徳さんの親父は、何處へ行つたものか絶対に分らぬ、今日に至るまで、未だ
判らぬのだ。徳さん一家は、武術試合の夜の家出の時を、父の死んだ日、死んだ時として諦め
切れぬ諦めをするよりほかなかつた。

徳さんの家は、この歸らぬ父を搜索する爲めに破産した。

彼の親父は西郷隆盛ではないのだから、子孫の爲に美田を買はずとはいつて居なかつたに相
違ない、残すべきほどの財産があつたのだが、知らぬうちに自分自身がつかひ果したことにな
つてしまつた。

父の搜索を諦めねばならなくなつた時、同時に徳さんは生きて行かねばならぬ人生といふも
のに逢着するのであつた。

徳さん自身にとつて、働いて食ふといふことは、さまでの苦痛でなかつたに相違ない、いや
それよりもつと、生きねばならぬ事實の方が端的であるこれ以上の現實がない限り、徳さん
が働くことに何の異存はないのだが、只時々こんなことを思つた。

「親父さへ家出をして呉れなければ、こんな苦勞はしなかつたらうに」
と。

思ふに、無理はない、徳さんは徳さんで、食つて生きる以外に、生きるために飲まねばなら
ぬ、これも極めて端的な一つの條件があつた、徳さんは親ゆづりの酒飲みであつた、彼の酒は
健康とか衛生とかを超越してゐた。

親 讓 り の 酒

何ぼう嬉しまぎれでも、一夜に九升餘の酒を飲んで家出した親父である、その親父をもつ徳
さんの酒は、親ゆづりであり、遺傳であるかも知れない。徳さんは生きるために働いて行く身
となつて、尙一つ附け足りの酒のために、如何に苦しんだか知れない。やめやうたつてやめる

ことの出来ない酒である。そのために徳さんはどんなに苦勞をしたつて厭ふところではなかつた。

徳さんの酒が遺傳か否かについて、つとめていふまいとして居るのだが本性が現はれる、小生こゝで遺傳についての醫學を述べて見なければ納まらぬ氣持になつて来た。

一體、親から傳はる性質の質量といふのは、どの程度であるかは、實際に於て随分と疑問がある。

ケンブリッジ大學の人類改善科で、曾て實驗した所によると酒といふものは、子孫に何等の害毒をも流さぬといふ結論になつた。親が如何に大酒飲みであらうとそのため馬鹿者や虚弱の子が生れるといふものでない、大酒家の子に白痴が生れたといふ事實が時々はあるにしてもそれは親が酒を飲んだ爲めではなくて、親の本性が悪いために馬鹿が生れたといふのである。

今日ではさうでもないが、醫者と生物學者といふものは、論の立て方見方が違つてゐたものである。醫者のいふ衛生といふのは、美食をして滋養分を攝取し、住宅を清潔にすることで、醫者のいふ立派な身體といふのは先づ以て肥満した人を指したものであつた。

然るに生物學者の方でいふ立派な身體といふのは、本性のよい子孫の繁殖力の強い人間をいふのであつた。

此理から行くと、遺傳といふものは未だに確然とせぬ理論で酒についての實例を挙げれば妊娠中の母が酒を呑むことは、いけぬといふよりは寧ろ危険とさへいはれたものであるが、實際の結果は、それは酒が悪いのでなくて、父及び母の本性がよくなかつたといふことになる。

わが徳さんの場合は何れに屬したか知らぬが、酒飲みであるといふことだけは、親ゆづりが不可ならば、親と同じく酒が好きであつたといふことになる。

遺傳學上に於ける一つの考察として、優性と劣性とがある、たとへば、人間の頭髮は黒いのが優性で、その他の色は劣性であり、眼の色は褐色が優性で、さうでないのは劣性、皮膚は餘り白くないのが優性で白い方が劣性なのである。

容貌でいふならば、下唇の厚く出たものが優性で、この反対なものが劣性である、性質の方では神経質が優性、遲鈍な方が劣性、才氣は平凡な方が優性で天才及び低能は劣性である。

そこで、色盲とか禿頭とか、神経系統とか、癩癩、低能、發狂、犯罪性とかと共に、酒癖といふやうなものが、著るしい遺傳性のものであるが、之はみな劣性なのである。勿論、幾多の例外はある、だから徳さんの酒は例外に屬して、親からの遺傳であるかも知れず、或は劣性であるべき酒が、優性になつたのかも知れないが、徳さんは何うせ一日も酒なくしては暮らせぬ人間であつたのだ。

酒呑みとして、今日に及んで來た飲んだレコードを取つたなら、親に劣らぬ酒飲みであつた三升五升は獨酌でもやれた、若しいまどき昔のやうに大食ひ大飲みの大會といふやうな悠暢なことが許されたなら、二と下つても三とは下らぬ大酒飲みの徳さんであつたかも知れぬ、徳さんは生活と闘ひ酒と闘ひ食ふて飲んで遂に五十年、碌々として何一つ男子本懷の事業をしたといふ譯でなし、無論彼の名聲といふやうなものが、一つとして世に現はれてはゐない、只彼を知る極めて少數が、徳さんは酒飲みであるといふ位の範圍で彼を知つてゐるばかりである、だが彼の酒は實に三昧に入り、古來の酒飲みには見られぬ眞の酒仙の面影を成就したのである。

酒生一如の境

近來の徳さんの酒たるや、まつたく酒生一如の趣がある。

最近の一ツの例があるが、徳さんは或所で或仕事の手傳ひを頼まれた、明日はその仕事が終わる日である。

仕事主は、豫々徳さんの酒好きを知つてゐる。

「ネ徳さん、明日仕事が終わつたら、お祝ひに一杯やりませうや」

といふや否や、徳んの身體は、俄にシヤンとして、その眼のいろは活きくと輝き出した。

あすの酒——その一語が耳から入つた刹那、酒と一心同體である徳さんの體は、言葉の注射で酒精分の活躍を始めた。

彼は明日の酒を飲む希望に甦へると、一生懸命に仕事を始めた、酒を飲むといふ希望の爲めに徳さんの體は既に飲んだと同じ効用を發揮したのである、明日の酒を、百萬兩を頂戴するよりは有りがたく徳さんはニコ／＼と働いて仕事を完成することに急いだものである。

さて徳さんが酒を飲むべき當日とはなつた、その日の朝から徳さんは晩餐に出さるゝ酒を待つて、飯を差し控へて腹加減を調節してゐた、そして、その夜僅かに三合ほどの酒を飲んで徳さんはいゝ氣持ちに酔つてしまつた。

「もう澤山だ、これ以上飲んで折角の酔の氣持ちが臺なしになります」

徳さんは眼をとろんこにして、唇をなめた。

「さうかい、それぢやこれだけにしやう」

といふ言葉を聞いた時の徳さんのその最後の一杯を飲む様子である、いかに彼が酒を楽しむ人であることか。

徳さんは注がれた最後の一杯を、なか／＼唇まで持つて行こうとしない、それは恰も、猫が鼠を獲つて、容易にむしやぶりつかず、暫らくはなぶつて楽しんでゐる様な様子である。

そして徐ろに、一杯を手にした徳さんは、この一杯に満身の精氣と熱意をこめて靜かに唇に當てた、全くその態度は、酒生渾然、三味の境に恍惚たるもので、彼はその一杯の後に

「どうぞでもう一杯」

といはれても頑として受けつけない、生命を賭した前後の一杯に徳さんは、酒の妙味の髓の髓まできはめてしまつたのである。更に一杯でも重ねることは、その努力と、その味はつた彌陀の心持を壊すことになる。

「いや御馳走さまでした」

さういつてその家を辭した、徳さんはもう天下何ものも愉快ならざるなし、道の邊の草木にさへ、その嬉しさを知らせたいやうな足取りで家路へと向つて行つた、そして徳さんはかういふのだ。

「思ひももうけず酒に有りついた時よりは、前々から約束があつてその日を持つ方が、どれだけ樂しみが深いかわりませんや、かういふ酒は少し飲んで氣持ちよく酔ふことが出来ますよ」

一家和合鑑

世に四字の訓へといふて「かんにん」と書かせる「かんにんの、なるかんにんは誰もする方らぬ勘忍するがかにん」または「氣に入らぬ風もあらうに柳かな」と勘忍強きを説く。ところが、何と勘忍しやうとしても、男である意地である、正義である場合、ならぬ勘忍もあるものである。その爲めには「勘忍のなる勘忍をするがよし、ならぬ勘忍するぬ勘忍」と作り代へて、

春風をぶんなぐつたる柳かな

と訓へてゐる。

五字の訓へといふは「うへみるな」である。五常道とは、仁義、禮、智、信であるが、これとても程を失つては却て害となるとあつて、古の名君は左の様に附け足しをした。

一、仁に過れば弱くなる。

一、義に過れば堅すぎる。

一、禮に過ればへつらいとなり。

一、智に過れば嘘をつく。

一、信に過れば損をする。

文豪夏目漱石は「草枕」の中で「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、兎角人の世は住みにくい」といつてゐるが、これまた古今の名句、だから古人は七字の訓へに於て「身のほどを知れ」と妙味ある文字を示してゐる。

この一家和合繁昌の鑑は、安政のころの家庭訓であるが、現代にこれを唱和して、決して時代離れた、はげ頭の申分だと排斥されべきものでないと思ふ。

人生 七 つ い ろ は

いろはの文は即ち、いろにほへとちりぬるを（色は匂へど散りぬるを）これは佛説の諸行無

常である。わかよたれそつねならむ（我世誰ぞ常ならん）これは生滅法を表はす、うゐのおくやまけふこえて（有爲の奥山今日越て）生滅々已の意。あさきゆめみしゑひもせす（淺き夢見し酔もせず）とりも直さず寂滅爲樂であらう。

石淵寺の勅撰、延暦寺の最勝、高野山の空海の三人が、相ともに唱和して作つたといふ説と元興寺の護命と空海との合作であるといふ説との二つがあるがこの四十七字は決して新しく起つたものでなく、天竺の悉曇の字母にもとづいて、始めて草字を作つたもので、唱和でも台作でもなく、空海一人の作であると思はれる。

「京」と「ん」とは後人の加へたものである。

この七ついろはは誰の作であるか不明であるが、一つ／＼に就ての歌は、よくその教訓を示してゐる。

梅ヶ枝に心とまらば鶯のほうほけきやうの匂ひぬるかな

主人の心得べき事

一、凡そ一軒の主人なる身は親より譲りの家業を大切に守り他所の商賣を羨むべからざること。

一、日々帳面改め、商内の多少、金銀の出入等を見るべきこと。

一、奉公人の働き振り、精を出すと鈍きとを見分け、鈍き者は時々、詞やはらかに教へ勵ますこと。

一、質素儉約を守り、美服は勿論、高價の品無用たるべきこと。

一、附合、一家中の義理、順義をかくべからざること。

一、儉約を言立て、吝嗇を専らとし、己一分の利を計り、他人の痛ことを顧みざるが如き行ひあるまじきこと。

一、内にては儉約を守る様に見せて、外にては無益の金銀を費すが如きことあるまじきこと

一、家宅は華美を飾らず、質素にして無益の物好き無用のこと。

- 一、奉公人の、争論兩方を聞訊し、依估最良爲すまじきこと。
- 一、商賈は高利を貪らず、物を買占めず、萬事正路を守り、不實あるべからざること。
- 一、奉公人及び出入の者方へは、相應の慈悲、憐れみあるべきこと。
- 一、先祖の年忌法事町嚙につとめ、善根を心掛けべきこと。
- 一、右の外いろくの心得あるべし。世上に主たる人、内にては吝きことばかりいひながら青樓、料理屋にて奢侈榮耀に金銀を費し、或は奉公人には粗き物ばかり食はし、その身はむまき物を用ひ、或は一家親類に無心に來る者あれば、泣事ばかりいふて斷り、我に詔ふ取巻の者には金銀を貸し、家業は奉公人にふり向け、その身は遊藝遊山等に暮す人多し、これ等は遂に身代を持崩すか、又は短命なるべし、又儉約を吝吝と心得、萬事惡吝く、人の謗を耳にもかけず、錢金さへ延ばせばよきことと思ひ、一文の錢をも吝み、一家附合の義理を缺き、人に振舞ひを受けても終に振舞ひかへせしこともなく、貸した物は厘毛の埃まで取り、拂ふ金は仕かけ不足をし、却て無慈悲にて施しといふことを知らず、金錢の番人となり、有財餓鬼と謗られ、一生貧乏人同様に朽果るものあり。只過不及なく、萬事に氣を配り、家業を大切にし、先祖を

辱めず、家長久、子孫の榮をはかるこそ主人の勤めなるべし。

ろ(露) 住吉の松のしづくにぬれ初めてつひしようらう(松露と住吉明神の鐘樓にかく)

の身とはなりにけり。

は(波) ふねとめてしばし漂ふ三保の海波に浮べる紅葉ばのいろ。

に(忍) じつそらの深山の清水波み見れば月も水にぞしのぶなりけり。

ほ(浦) 乗り得たる波間の船は三井寺へよするは清きしがの浦風。

女房の心得べき事

- 一、扱て女房たる身は、内をよく治め、世帯の入用に費なき様、萬事儉約にすべきこと。
- 一、日々惣菜は、大體前日に買調へ、その日になりて手支へぬ様すべきこと。
- 但し現金買をよし。

借ては高き物と知るべし。

一、惣菜を下女に煮さすとも自ら加減を試み、辛からず、水くさからず、よく火を足らし味よくすべきこと。

一、夫、我子、または奉公人にても、衣服垢じみ穢れたるは女房の耻なりと心得、手まめにすゝぎ洗濯して、見ぐるしからぬ様すべきこと。

一、身を小ざつぱりと指、手足の爪を伸ばさず、鐵槩はげぬ様すべきこと。(これは現代の女房にはないことである。筆者)

一、衣服、髪等おとなしく、分限不相應の態すまじきこと。

一、親類または得意衆など來りし時、叮嚀に挨拶し、假にも不興なる顔付すまじきこと。但し、みすくの追従をいひ又はあまり言葉數多からぬ様すべし。

一、他人に向ひ、我子の自慢話すまじきこと。

一、奉公人をいたはり、仕落ありとも大聲に叱り、又は打擲などゆめくすまじきこと。

一、夫の外、男と耳語漸または戲事など決していふまじきこと。

一、男、姑を大切にし、夫に對し愀氣がましきこと慎むべきこと。

一、人中にて物多く食せず、酒は平日にても堅く飲みまじきこと

一、右のほか女房の心得數多あるべし。世上の内室の中には夫のことは構はず、我身ばかり洗磨し、髮派手に結び、目にたつ衣服を着、白粉こく、口紅玉むしの如くつけて、さながら遊女めかして役者の振りを真似、芝居役者などいへば現を抜かして聞き、又は人さへ見れば隣近所の譏り咄し、かり初めことにも下女丁稚を叱り、夫の歸りが遅くなれば行先を根問ひしてはや愀氣して面をふくらし、氣に好た男が來れば酒よ餅よともてなし、氣に入らぬ人にはろくく詞もかけず、今機嫌がよいと思へば忽ち不興な顔つきし、機嫌買といはれ、常に夫を尻にしき、商の應對にさして口をきく、或は常に酒を吞で猥がはしきこと多く、又は物吝みして慾深きも間を多し。

これでは遂に世間の人に愛想をつかさされ、夫に去らるゝもあり、さなくとも家の衰微眼前にあり。只女房たる身は萬事を慎み、人前にも利口立せず、詞少に女らしく、夫を重んじ世帯を儉約にし、いやしからず高ぶらぬこそ、その嗜たるべし。

子息の守る事

- 一、幼少の内より、手習素讀の稽古をし、十二三歳より算盤をはげみ習ふこと。
- 一、十五六歳より、家業に精を出し、奉公人同様働くべきこと。
- 一、遊所は勿論、娘、婢女その他、いろがましきこと慎むべきこと、良きことを選びて、悪き友に交るまじきこと。
- 一、遊藝は分限に應じ、誦、生花、薄茶、手藝等少々、三味線淨瑠璃その他の藝は無用たるべし。たとへよき藝にても、それに耽り家業を疎にすまじきこと。
- 一、四十過ぎるまでは酒を慎み、禍ひの種と心得べきこと。
- 一、碁、將棋、すご六總ての勝負事は身の仇なりと思ひ、ゆめく携はるべからざること。
- 一、衣服、紙入、提物等は、華美なるものを好まず、公道の控を謹み質素たるべきこと。
- 一、いとまある折は、手習讀書し、忠孝五常の道を辨まふべきこと。
- 一、その他、若きうちは萬事を慎しむべし、世上の若き人の中には、我が身上のよきか、ま

たは權威のよきあれば、自慢の鼻を高ふし、我身を驕り人を見下し、三味線、胡弓、尺八などを凝り習ひ、總て女子の集る席へ立ちまぢり、女に思はれんとて見榮を飾り、或は悪しき友に薦められて、色街へ通ひ一夜なかれの遊女の空誓文を誠と思ひ、現を抜かして適々諫言する人あれども馬耳東風、親のものは子のものよ、若き時は二度はなし今少々の楽しみをすして、いつなすべき。

青樓の敷居を踏まぬは男にあらすとつぶやき、親が辛苦して儲け貯めし金銀を、湯水の様に遣ひ捨て、果ては茶屋の拂ひにつまり、雜費多くかゝる金を借り、義理わるき借金につまり、遂には親の勘當を受け、仕つけもせぬ手代奉公をするか、又は他人の食客となり、今までの榮耀に事變り、粗食氣兼の身となるも金銀の罰なり。

されば息子たる人は、色と酒とを慎み、夜遊夜更しもせず、兩身に案じかけぬ様に、常々心にかけて守るべきこと第一なり。

一、二三男たる者は、他の家に養子となるとも、その家の舅、姑を實の親の如く仕へ、身上を譲られたればとて自分勝手のことをすべからず、その家を大切を守り、永續をはかるべし

養家の衰へとなるはその者の不届にして、耻辱なり。況や養家滅亡に及ぶは、養子たる者の大罪なり。他の家督を嗣ぎながら我儘に長じ、恩を忘れ我働きと思ふことゆめ／＼あるべからず。實子なき故の養子なれば、萬事格別に慎み守るべきこと肝要なり。

實家、養家に限らず、譲り受けたる金銀身代を大切にし、一圖に家業に精を出さば、商賣も繁昌——その身の孝道も立ち、世間の息子の鑑ともなるべし。

娘の守るべき道

- 一、娘たる身は幼少の内より手習ひ、十二三歳より縫針のわざを勵み習ふべきこと。
- 一、身分によつて琴三味線も心掛けてよし。中分より下は習はずとも苦るしからず。いとまある時は、女大學その他身の躰方になるべき本をば讀むべきこと。
- 一、よろづおとなしく、髮化粧、衣服など伊達を好まづ、特に端近く出ぬ様にし、諸事言葉少なすべきこと。
- 一、男に心易げにはせず、世事かこきこといはず、慚巧だてすまじきこと。

- 一、髪は自分で結習ひ、人に手傳はずことあるまじきこと。
- 一、親の言葉に背かず孝行を忘れず、兄姉を敬ひ、弟妹をあはれみ、兄弟仲睦じくすべきこと。

- 一、下女丁稚にも詞やさしく假りにも大聲して叱ることあるまじきこと。
- 一、役者の噂、男のよし悪を取沙汰せざること。
- 一、内の娘は氣隨氣儘出安きものなり。養子を取らば大切にしてい、親々の蔭になり貞心を盡すべきこと

- 一、右のほか諸事女らしくし假にも遊女役者の風俗を見習ふべからず。世には親の嫉悪く、十二三よりませ過ぎ、男さへ見れば猥の目し、おかしくもなきことをげら／＼笑ひ、又しても親々をせがみて派手下須なる流行ものを買はせ、櫛かんざしも役者の紋の入りしを嬉しがり、芝居は變る度毎に見たがり、内に居れば食物を貪り、琴三味線には凝れども縫針を嫌ひ、親々の言葉に背き、かり染のことも顔をふくらすね廻り、近所となりにと夜遊びして、下女丁稚を使ふに叱り飛ばし、些細のことにても親に告口し、又は賢がりて人のことをそしり、三

日に上げず物見遊山に出たがりなどする娘まゝ多し。

【筆者曰ふ。間々多いどころかこうした娘は現代では間々少くなつた。あゝモガよモガよ】
 これみな親の嫉の悪き故なり餘所の悪風俗は見習ふべからず育て悪しといへども、元はその
 身の心掛け悪く、氣随氣儘より出ることにて、かやうの娘は容貌よくとも見覺めのするもの、
 嫁入りしても舅姑の氣を取りも得ず、夫に盡すことも疎にて遂には去られ、その身は勿論、
 親兄弟の顔をも汚すのなり。慎むべし。

へ(邊)そのかみにいつか我身は逢坂のほとりに迷ふうその世の中。

と(土)ほとけにも神にもなさばなるものを鬼につくれるいなりやきはも。

丁稚と小僧さん

一、丁稚奉公は親方を大切にし、朝早く起き掃除をし、水打ち、灰吹煙草盆の掃除等を叮嚀

にすべきこと。

一、使に行なば餘所見、道草せず早く行き、早く歸りて先方の返事を密らかに洩れなく返事

すべきこと。

一、朋輩の好悪を親方へ告口しまじきこと。

一、番頭手代乳母下女等に憎まれざる様にすべきこと。

一、着物を大切に着て、鍵さき汚さざる様氣をつけべきこと。

一、諸事返事をはきくとし假にも不返事すまじきこと。

一、夜は手習十露盤をはげみ居眠りすまじきこと。

一、寝しなには、したくなくとも小便し、夜中に取りはづさぬ様心掛るべきこと。

一、使ひにゆきし路にて犬をけしかけ、他の丁稚小僧と喧嘩口論ゆめくすまじきこと。

一、軒下を歩み、看板にて頭を打ち、溝へ落るが如きことなき様に注意すること。

一、宿下りするとも、六道、穴市、その他勝負事はすまじきこと。

一、總て丁稚奉公は主にも手代にも使たてらるゝものなれば、わけて辛抱のしにくきものな

れども、それを堪へ忍びなるたけ尻軽につとめ、如才なくし、用の閑ある間は読み書きに心掛
け商賣の駈引を能く覺える時は、手代になりし時のたしとなりて勤め安し。

丁稚奉公を忍べば、忽ち丁稚を使ふ身となるもの、心得悪き丁稚は萬事に骨惜みし、使ひに
出れば道草に暇を入れ、他所の丁稚子供相手に喧嘩し、衣類を引裂き、又は汚し、或はうつか
りと物に見入つて持たるものを搔つ拂はれ、或は小遣錢を盗んで買喰し、内では日にかゝるほ
どの摘まみ喰をし、水汲に行けば雑魚を掬ひ蟹を捕へ、またしても血鉢を割り、子の守をすれ
ば己が遊事に現をぬかして、主人の愛子に怪我をさせ、朋輩の蔭言を叩き、燈を見れば居眠り
手習ひは覺えねど流行唄は人より早く覺ゆる丁稚、これ等は終に親方に追出され、どこの家
も奉公仕遂げること能はず、果ては親にも見限られ、流浪艱難する身となるものなり。

手代番頭の心得

- 一、第一主人を大切にし、たとへ難かしき親方にてもあなどる可からざること。
- 二、朋輩仲睦じく、口論争ひを堅く慎むべきこと。

- 一、得意衆を大切にし、僅なる得意たりとも粗略にすべからざること。
- 一、店の勝手をよく會得すると共に、此家に我なくば立まじと、我儘氣儘すまじきこと。
- 一、我より新參の手代または丁稚ならば、勞はり假りにも言葉荒く用を言附けず、知らざる
ことは懇に教へ使ふべきこと。
- 一、金錢の取扱ひを正直にし僅かの錢にても私にすまじきこと。
- 一、主人より定めめの利、口錢の上を値賣りし、親方へは定めめの勘定にし、私の利を取るべか
らざること。

- 一、少々氣に叶はぬことありとも、無理に暇など願はざること。
- 一、得意廻りに出て、私に物見参り、または青樓、芝居などへ行べからざること。
- 一、下女、乳母その他、立入りする女と、不義の語らひすまじきこと。
- 一、右の條々堅く相守るべし親方の身代により奉公の上下はあるべけれども、心得に於ては
少しも變りあるべからず。心得悪き手代は表向きばかり實體に見せかけ、得意廻りに出るとて
風呂敷荷物を知邊に預け、物見芝居或は茶屋へ這入り込み、遅く歸つてあらぬ偽りをいひて主

人を騙り。

又は商の金錢を私し、筆先にて帳面を胡魔化し、親方の品物を私に安く賣拂て、おのが榮耀の代とし、ひそかに美服を調べて小宿へ預け置き、他所行きの場合にそれを着て、親方の若旦那より立派な顔をして内にては目下の者に無理をいひかけ、叱り罵り追つかひ、口先きばかり忠義がり、自が身の暗きもの癖として人の仕落ちは少しのことでも見出したがり、己と同腹中の者は最良して悪事をもいひ隠し奉公に私なき者をば忌み憎みて親方へ悪しざまにいひなし失敗させんと巧む手代世間に多くあり。

これ等は主人の罰、金銀の罰にて遂に追出され、浅間しき身に零落するものなり。只蔭日向なく奉公に身を入れて、主人を大切にすれば、その冥加にて末繁昌の身となるものと知るべし

ち(遅) いそがねど今日もめいどの旅の空みちに迷へばなほおそふなり。

り(離) けがれたる心離るゝ嬉しさは初音をいづる谷のうぐひす。

ぬ(奴) 世の中につとめぬものはなかりけり柳はみどり花はくれない。

る(留) なにひとつ止むるものはなけれどもわが月影をとめてくるしむ。

を(越) 月見れば只の一夜に西方に越ゆる我身と一つなりけり。

わ(和) やはらかな真綿のような心をばなどかたくなにするや世の人。

か(匂) 深山路に花はいろく咲にけり香のあるもよし香のなきもよし。

よ(餘) むそちから先づは餘生と人はいへどつくさん心われ忘れめやも。

乳母の心得

一、乳母奉公は主人より預かりの子を大切にし、晝夜心を用ひ少しも疎にすまじきこと。

一、日々の我食物を慎み、油こき魚等、時ならぬ筍、松茸などを喰へば、育つる子の毒となり病身となる。されば恐れ嗜むべきこと。

一、預かり子を寝さすとも、その子よく寝入らば我身は襪襪などを洗ひ、その他家内の用を手傳ふべきこと。

一、子を守して外へ出るとも食べ物を買つて喰ふまじきこと。

一、近隣の乳母子守など、餘り心易くならぬ様すべきこと。

一、不斷身の養生をし、乳のあがらぬ様用心すべきこと。
 一、育つる子抱瘡、はしかするか又は病患ふことあらば、晝夜とも怠りなく介抱し、我身の毒忌み、食養生し、神佛に祈つて本復を心掛くるべきこと。
 一、預かり子を我眞實の子と思ひ、萬事に氣をつけ、怪我過ちをさせぬ様守育てべきこと。
 一、右の外、乳母奉公の心得さまざまあるべし。元來、人の大切な子を預り育てる役にて、最も大切の奉公なれば、よく心責て勤むべきなり。世上の乳母の中には大切な子を育つるを鼻にかけ、我なくばといはぬばかりに諸事我意を振ひて、主人をあなどり日々茶を小言いひ、親方が彼是いへど内證で子にあたり、つねりつ叩きつし或は子の寝るをかこつけに日の上るまで朝寝し、又は子をだしに晝寝宵寝し、飯喰ひ箸を下に置や否、出歩いて近所の者と寄合ひ、互に親方のことを誹り合ひ子のこけ倒るゝを知らず。
 さらに下卑たる乳母は、親方より小遣ひ錢をせびり、子には一文か二文の餉をばねふらせ。己はずし芋よと買喰ひし、少し子が泣けば、此餓鬼は能くほへるの、いや性の悪い小俵のと大切なる主人の子を乞食の子の様に扱ひ、親方が洩れ聞いて苦言を呈すれば、嘘八百をいひ

ならべ、又は作り病氣を起して困らせるも多し。犬事の子を預かればこそ、高い給金を先貸し仕着せの外に古着を帯よとの心附をも仇に思ふは極道者といふものなれ。

た(堂) み佛のありかをよく探し見よおのがみどりのうちにあるなり。

れ(禮) れいぎをばせなへる萩の腰ひくう頭を下げる秋は來にけり。

そ(蘇) 悪心を日夜に殺せ殺しなばよみがへりたる人といふなり。

つ(通) ふたつなき心の奥を尋ね見よよに通ずるあかつきの鐘。

ね(根) 春秋の花のいろく匂へどもみな人は根のはちすなりけり。

な(名) へつらひの名利の花は散りもせで心の花のちりかゝるをば。

ら(裸) なに一つ心にとめぬ人はみな生れのまゝの裸なりけり。

む(無) ないくと思ふた罪は不二の山まよひの雲のはれてみつれば。

う(有) あけ暮れに思ひかさぬる浮雲を拂へばいづる有明の月。

ゐ(位) 位ある人も位のなき人も同じうてなのはちすなりけり。

の(野) おのが田によき種をまけ選ばずばよしあしともにはへ出づるもの。

お(尾) くらきよりなほも暗きへ迷ひなば尾のはへさがるものにこそあれ。
 く(空) へんてつも何にもなしのこのみならくふよりほかに味はひもなし。
 や(也) せんなりのおのが飄箆たづね見よ心が口の樂屋なりけり。
 ま(魔) 油断すなこと知り顔のすき間より自慢天狗のいりて来るなり。
 け(氣) きずいなる人の言葉の鐵砲の口にむかふな打たれては損。
 ふ(風) 我はたゞ水にいでたるのりの船風にまかせてかの岸につく。
 こ(粉) 何事もいそがば廻れひきうすのこゆえに迷ふ親心にて。

下女の心得

一、下女奉公は主人大切はいふに及ばず萬事優しく愛嬌を失はず、しかも身をおします健やかに働くべきこと。
 一、棚元廻りを清らかに洗ひ拭し、皿鉢茶碗その他の器物を破らぬ様、丁寧に取扱ふべきこと。

一、三度の食事ごしらへの間は、縫綴り洗濯などに精を出すべきこと。
 一、寝姿を慎み、朝疾く起きて髪をなでつけ、然る後に食事ごしらへに掛るべきこと。
 一、晝の働きに疲れて、夜は眠いものなれども堪へ忍び、夜なべに縫針を働かすべきこと。
 一、朋輩と話するとも、男の噂、色がましきこと大聲に高笑ひなどすべからず、随分淑やかにすべきこと。
 一、朋輩のあら探し、主人への悪口すまじきこと。
 一、度々暇を乞ひ親元宿などへ歸らぬ様心掛くべきこと。
 一、着類帯櫛など身に不相應の品を求むべからざること。
 一、その他、色がましきことを堅く慎しむべし。中には始めのほどはおとなしく、實體に見ゆれども、奉公駟れるに従つて親方を疎かにし、油うることはかりを考へ、たま／＼主に叱らるれば佛頂面して、何のこの家ばかりに日は照るまいしと心につぶやき、家内のことを他人の方へ行つて悪しざまにいひ散らし、不相應の衣服、櫛かんざしを買もとめ、頭と顔はやつせども、足は爪長く延び、踵は垢じみしに氣もつかず、男さへ見ればいやな眼つきしいゝ女がりて

尻ふり廻し、様子つくるに引代へて人の見ぬ間には摘み喰ひし、座つて針持てばはや居眼りを
する。

かと思へば芝居漸か男の噂には俄に目をさまして喋り出し、いつも間にやら男をこしらへ、
親が目を廻したの、伯母が死んだのと空言ちらして主にいとまを乞ひ、隠し男と忍び會ひ、親
方に一年とつとむること能はず、半季になる間を待ちかねて出代りし、口入屋へ行きて同じ奉
公猿と愚にもつかぬ話に目を送る。これ等は自分が世帯を持つやうになつて思ひ知るものであ
る。下女奉公も身の堅めと思ふて、斯様のことなき様よく辛抱して勤むべきものなり。

え(江) 濁り江に深く沈みし人はみなはちすの花のうもれ咲かな。

て(天) あだにをく末葉の露の身と知りて浮世にすめば天命も知る。

あ(安) みよしの、峰の紅葉となりぬれば心はやすきものにこそあれ。

さ(作) 帆を造り船を作つてるを作りかぢは念佛みだの帆ばしら。

き(起) いたづらにかくと知らせん胸の火のおこるははれぬ思ひなりけり。

ゆ(油) どんあいのしめ木に誰も絞られて身のあぶらをばこぼすなりけり。

め(妙) 妙法の世界にいでし人はみな蓮華衆生と誦したまふなり。

み(見) むら雲の霽れ間に見ゆる有明の月見ることく心あかるく。

し(新) たちかへり又も新に玉ぼこのやどりはつゆの風ぞ吹きしく。

ゑ(惠) たゞ人をめぐむ心のふかければまた上もなほ道ぞもとむる。

ひ(火) 千萬の財とばかりは思ふなよわが身もいつか灰となるをば。

も(毛) くらかみの元結とかぬ限りには中なる玉を知る人ぞなき。

せ(世) 世はありのまゝに開くる花のみは紅ならばくらに咲く。

す(守) 守らるゝ心の社あらためば誠の道にかなふ福神。

以上で一家和合鑑は終るが、最近外国雑誌から妻の不貞を觀破する秘訣といふ痛快な讀物
を發見したから左に紹介しよう、これも利用次第で反對に一家和合の秘訣とならうといふ
ものである。

良人かゝる時妻は不貞なり
讀本

親愛なる友よ。

貴下の御申越しの件尋常ならずと存じ候。

そは妻の不貞を推斷せんとして、小生に二十箇條のサインをあげさせるに外ならぬ申越しと存ぜられ候。つまり分り易く申せば、妻たるものを信用する勿れといふ意見を裏書せん御心と察し上候。貴下にして若し結婚者ならば、小生禮義を守り斷然お答へすまじく候。何となれば一は貴下の樂しがるべき結婚生活を亂さぬ爲、一はかくいふ小生が如何にナイーブで而も無經驗者なるかを、他の夫達に知らるゝを好まぬが故に候。

貴下も何日の日か結婚なさるべく候へどもその日の遠くして、この手紙の忘れた頃なることを望み居り候。この手紙は御讀了次第お焼き捨て下され度候、更に次に指摘する不貞徵候二十箇條が、實際に適用されざることを深く望み居り候。これ等の二十箇條のものは、貴下が小生の眞價以上に信用せらるゝに係らず自分といふ男は、世男中で一番愚か者だといふことを示す

に過ぎず、又係る小生に妻の心理觀破法（この二十箇條は凡て日常生活より得たるものに候）をお問ひになる貴下の方が或は優れて居るやも知れず候、小生の信する處に依れば、妻の不貞の徵候は少くも百四十二萬七千有之候、愛すれば愛する程少く候（小生には夫が妻を熱愛する時二十以上この徵候ありとは思はれず候）

然して小生がこの答へは、妻の不信用を曝露するものゝみに候。

妻の不貞診斷二十箇條

- 1 若し、從來何事にも鈍間で、多飯時に帰宅せぬ妻が、急に時計の如く正確になり「一時間もお待ちしてたのに、どうしてこんなに遅くお歸でりしたの」等といふやうになつた時。
- 2 外出する時より、帰宅した時に、いつそ紅白紛が目立つて濃くつけてあつた時。お化粧の様式の異なるは、美術家の表現派と印象派と異ると同じ。彼女が外出する時は印象派で、帰宅に際しては、お化粧が蒼惶の中にあつて、亂暴ではなけれど適當を缺いてゐる、つまり表現派なり。

3 夫に對して平常よりも優しく、豫期以上に情濃やかに、本性以上に淑やかに振舞ふ時。係かる時彼女の心理は、かく判定される「あなたはお疲れのやうですね、この頃餘り遅くまでお働きだからですよ」「少し仕事を休みになつても宜もうございませう」若し夫が病氣になると、一寸して風邪を肺炎と間違へていそ／＼と輕々しく世話をする、これは傷ついてゐる良心に對して幾分でも申譯をしたいからである。多くの場合、夫の病氣が案外輕いので残念がるもつと悪くて自分の罪を後悔したいのだ。

4 急に自分のする用事を多すぎると不平をいふ時。外套、靴、下着を買つたり、齒醫者、美容館、慈善會、カルタ、病氣見舞、今週の中に足し切れやしないなんといふのだ。

5 十二月か一月になると直ぐ何處か避寒地へ行きますやとせがむ時。之は夫に外の海へ行くなつていへせない先の豫防線である。

6 急に労働者は可哀想だなんていひ出した時。さうなると、こんな非道い天氣に一日運轉する自動車運轉手はお氣の毒だ、家の運轉手を先に歸宅せしめ、自分はタキシを雇ふ。

7 寶石類、大抵首飾か腕時計を「或寶石商の店に」置き忘れて來たといふ時。かうして翌

夜「ある正直な人」が見つけて返してくれたと嬉しさに報告するのだ。

8 これまで詰らない嘔吐だとかどうとか何とかたまたまにしかいつたことのない男の友達のことを喋舌べるやうになつた時。彼は外から噂をされない中に自分からいひふらして却つて何でもないことの様に思はせてしまふのだ。

9 怪しいと思ふ男について、充分無頓着に語ることが出来ないならば、彼女は無頓着を誇張してこんな極端なことまでいふ「××さんあんな人、二人きり絶海の孤島に流されてゐたつて何でもないわ」(フロイド教授の言によれば、この大袈裟な言葉は、慾望を押し付けたもので、實は一緒に島流しにされたいのだ)

10 人名簿を作ることを止めた時。是迄何日も、集り、晩餐會等、彼女自身でやつてゐたのが、今度は「妾嫌ひな男の方を呼ぶ勇氣はありませんわ」なんといつて夫の仕事にしてしまふ一方、夫の行きたがる集りには行きたくない様子をする。勿論結局はしぶ／＼行くやうにする(こんな時はいつだつて「彼」も出席してゐるに決つてゐる)

11 若し、夫から何か高價な物、寶石類か毛皮の外套を買つて貰つて、前とは違ひ内心濟ま

ない氣で表面非常に喜んだなら「こんな高いものを貰つていゝのかしら」なんていふ（これは疑ひなく貞淑な氣持になつた時で、少くも、良心に苛められてゐる時だ）

12 寫眞をちよい／＼寫すやうになつたなら。但し同じ寫眞屋へ二度と行かない。

13 新しい眞理を發見する様になつた時。例へば「子供を多く持てる婦人は幸福なり」とか「私男に生れ、ばよかつた」「人生は不正なり」「女は不良なり、然れども男は更に不良なり」彼女が驚いてよくいふことは「なんて人生は短いんでせう」

14 これまであんまり親しくなかつた女の友達を、急に愛し初めた時。彼女はその友にちよい／＼電話をかける。然し直按でなく或奥様に友人を呼んで貰ふ。彼女の方は屢々その女の友人を訪問するのに、友人は稀にしか來ない。彼女はその友人の名をいはずに、こんなことを夫にいふ「あの方があんなに誠實だとは思はなかつたわ」

15 手紙を一本も出さないのに、手紙用箋だの封筒が無くなるならば。

16 小食になり、喫煙が繁くなつたら。

17 近來離婚數が著しく増加して來た、と夫が何氣なしに靜かに論ずる時、彼女が若し「私

達は決して離婚しませんわ、あなたの様な方を夫にして妾幸福に思ひますわ」その他同じやうな意味のことをいふならば。

18 今まで夫が稀に彼女宛の手紙を開封すると思つたものが「面倒だから私の手紙を読んで頂戴」等と、朝の郵便物を夫に讀ませるやうならば。

19 これまで寝しなにベッドの中で夕刊を讀むのを楽しみにしてゐた妻が、痴情から殺人を犯した記事の掲載されてゐる新聞をさへ讀まないやうなら（これは、翌朝、その新聞の具合を見るときもなく見たつて讀まなかつたことは立證される）

20 輕快な當世風の音楽を好まなくなり眞面目な種のものをお好むやうになつたら。此現象は實驗によると次の如し。

シヨパンⅡ疑。彼女は彼の作品中どれかに強い興味を持つ。夫は注意を要す。

グライグⅡ戀に落つ。

シューマンⅡ戀の狂熱保險付。

リチャード、ストラウスⅡ戀のクライマックス。

マツセネー悶えてゐる。
もう一度シヨバン(戀の終り)

小生、故意に書き落したる事有之、そは妻の不貞期の徴候中最も自然なるものにして、夫に對して嫉妬深くなる事之に候。この徴候は古來遍く知られたるものなれば、特に貴下の注意を喚ぶに及ばずと存せられ候。

これで小生の信書は終り候へ共末尾に二つ申添ふべく、第一以上列舉せしサインは、かゝる時妻は不貞なりといふ誤らざる指示書にしてかゝる徴候あつて初めて夫は驚き入るといふ次第のものに候。第二、このサイン中、大切なる個條程夫として知りながらぬものなること、而してそれが妻の罪を容易ならしむる事之にて候。幾分の悲しさと、眞面目な同情を感じつゝ此筆さし擱き候。

草々頓首

諸君如何がでござる、思ひ當る所はござらぬか？ 筆者も文中の口吻を借りて「實際に適用されざることを深く望み」をく次第である。

數へ歌

一つとやーといふ數へ歌、いま實は研究中ではあるが、全國を尋ねると随分多い數に上るとだらうと楽しんでゐる。このいろはや、その他の讀み込み歌は、その次手に出來上つた一つの未完稿である、明治二十年前後の人で、大日本教育會の稻葉原(實は原を三つ重ねた字)麟といふ人に「大日本國體いろは歌」といふのがある。」

いよいよ國光かどやきて
ろ 六合てらさぬくまもなく
は 萬國こもく來朝す
に 人情あつく土地肥て
ほ 穂に出る稻の瑞穂國
へ 偏なく黨なく王道の

と 徳化四海にみち／＼て
ち 千代に八千代をかさねて
り りよしくゆかし大内に
ぬ 擢んじ出し高御位
る 類は五洲に絶えてなく
を 治まる御代の根源は
わ 我が皇統の綿々と
か かはらず續く一系統
よ 世にも稀なる國柄に
た 大義名分定まれる
れ 例や證據を擧げんには
そ その君臣の別を見よ
つ 鶴の鶏群に立つ如く

ね ねらひうかどふものもなく
な 内憂外患あるときは
ら 老幼男女の區別なく
む 寧ろ身命擲つも
う 憂きとはせざるのみならず
ゐ 因循躊躇のさまもなく
の のちの榮譽を重んじて
お 己れ人には劣らじと
く 活潑の舉動をなす
や や 八咫鏡は智となして
ま ま 眞ケ玉則仁となり
け 劍はすなはち勇ぞかし
ふ 不朽の神徳あらわせる

こ これこの三種の神器こそ
 え 夷に決してあらざらん
 て 天皇陛下のその徳に
 あ 青き艸までふしなびき
 さ 産を勵みて分をまもり
 き 業のひまある折々の
 ゆ 夕な朝な樂しみに
 め 眼にはながむる櫻花
 み 耳にはなくさむ大和琴
 し 眞に樂しき風景に
 る 酔いて吟じて賞讃す
 ひ 琵琶の湖不二の山
 も 素より尊き我國は

せ 聖賢代々統を繼ぎ

す すめらみことは萬々歳

この稻葉氏の作に他にまだ二つのいろは歌のあることを最近になつて發見した、まだ多くあるのかも知れない、といふ慾望は起つてゐるが、調べる術がないので、それだけでも見つけ出したことにせめて満足してゐる次第である。

稻葉原隣氏作「子を思ふ親の伊呂波歌」

い いづくの親の心根も
 ろ 魯となく智となくみな同じ
 は 初めて赤兒の生るれば
 に 日夜心にいたはりて
 ほ 骨の折れるもいとひなく
 へ 平生母は兒が泣けば
 と 取るものさへもとり敢ず

ち 乳をのませつ慰めつ
 り 両親なにからなにもでも
 ぬ 抜け目落度は更になく
 る 縷々と睦言くりかへし
 を 折には手づから兒守なし
 わ 我身のことはうちわすれ
 か 可愛やいとしと思ふ兒の
 よ よろこぶ顔を樂しみに
 た 體をば育てるのみならず
 れ 禮儀や作法や身のしつけ
 そ 疎略のことは戒めて
 つ 常に智恵つく事柄を
 ね 寝ても起きてもをしへつゝ

な ならわしまでも氣を付て
 ら 樂々暮す日とてなく
 む 無我夢中のをさなごが
 う 飢に寒さに泣き號ぶ
 ゐ 坐ながらさへも尿管し
 の のみくひ起き臥すその世話は
 お 親の丹誠いかばかり
 く 苦勞も子の爲め先越して
 や やみはせぬかと案じつゝ
 ま まめのみいのる親心
 け 實にしたしきは朝夕に
 ふ 父母の膝下に可愛兒が
 こ 心地もよげに打笑ひ

えんもゆかりも知り顔に
 て手なづき慕ふ愛らしさ
 あ嗚呼世に樂しみに數あれど
 ささばりか樂しきものならん
 き氣儘に遊ぶ親のもと
 ゆ夢にもわすれぬ我が子には
 ぬ面倒も難儀も苦になさず
 み身にはかへても心配し
 し眞に不爲と見るときは
 ゑ會得するまで異見なし
 ひ人となしたるおやの恩
 も若しも子として報ひすば
 せ世間に不孝の名や立たん

す 即ち禽獸におとるならん
 同じく「楠公父子訣別の伊呂波歌」
 い いざや正行父が身の
 ろ 露命もせまる今日を明日
 は はやくそなたへ遺訓せん
 に 人間七たび生きかへり
 ほ ほろぼしてよや彼の賊を
 へ 平常心を動かさず
 と 時には盛衰あればとて
 ち 父の教へに違ふなよ
 り 利の爲め義をば缺かずして
 ぬ 擢じ出たる忠節を
 る 累代子孫相繼ぎて

を惜しき命も惜むまじ
 わ我今此世を去り行かば
 かなならず足利尊氏の
 よ世とはなるらんその時は
 た誰が叡慮を安んぜん
 れ黎民塗炭に苦しまん
 そそなたが親への孝行は
 つ常に帝を護衛なし
 ね佞姦遠くへ退けて
 な南柯の夢も空にせず
 ら鸞輿を都へかへらしめ
 む無爲の治世に爲すにあり
 う運をば天にまかせおき

ゐ因循姑息はなさずして
 ののちの世までも名を残せ
 お己れが一門一族は
 く降るなぞいふあさましき
 や野心は決して起すまじ
 ま末代かはらぬ大君の
 け系統の正閏辨へて
 ふ不義の富貴は求めまじ
 こ國家に背く逆賊が
 え榮耀榮華を極むとも
 て天の網には洩れずして
 あ悪名千代に流るべし
 ささきにたゞぬは後悔ぞ

き 記念に残す言の葉の
 ゆ 行末かならず忘るゝな
 め 目ざす荒波いよ高く
 み みなと川へとさして行く
 し 死出の首途のくり言を
 ゑ 會得しつらん正行も
 ひ 悲憤に堪へぬそぶりにて
 も もはや河内へかへらんと
 せ せき來る涙ををしとどめ
 す 歎歎して訣れけり
 これは「家名目草」にあるいろは歌
 い、意地が悪い子は生れはつかぬ、直ぐが元より生れつき
 ろ、ろくろ心を思案で曲げる、まげにや曲らぬ我心

は、耻を知れかし耻をば知らにや、耻のかきあきするものぢや
 に、憎む筈なは不忠と不孝、外にや憎まうやうがない
 ほ、欲しや惜やの思案は鬼よ、樂な心を苦しめる
 へ、へしたことはないことないぞ知れた、通りがみなよいぞ
 と、とにも角にも親孝行と、主人忠義を忘りやんな
 ち、ちかひ親子にむごいを見れば、あかの他人は恐ろしや
 り、惻巧ぶるのは大方阿呆、知れた通りでよいことを
 め、ぬかるまいぞや思案の鬼がとつと地獄へつれて行く
 る、留守といはれぬおのれが心、善いも悪いも覺えあり
 を、男女の行儀が大事悪性物めは人のくす
 わ、我をたてねば悪事は出来ぬ、知れよ心に我はない
 か、金をほしがる底意がいやよ、人を見下す天狗すき
 よ、よだれ八尺流すは、色よ迷ひやとろさも覺えなし

た、ためによいこといふ者いやで、毒をあてがふ人がすき
 れ、禮儀だてこそをかしようござる、たてのないのが禮である
 そ、損をかけたなり無理をばするは得ぢやござらぬ損ぢやまで
 つ、常に主をば大事に思ひや、仕事するの、手が軽い
 ね、寝ても覺めても立ても居ても無理はいふまい無理せまい
 な、無いと思ふはそりや早思案、有の無のはみな迷ひ
 ら、樂がしたくば心を知りやれ、樂が心の生れつき
 む、むごいことをばいふたり仕たりすれば我身に皆報ふ
 う、うそは心に覺えがあるぞ、人は兎もあれ我が知る
 ゐ、井手の玉川丸くも見えぬ、何が流れぢや果がない
 の、飲めや歌へや一寸先や遠い、騒ぐおのれがまるで暗
 お、奥の奥まで探して見ても、限り知られぬ我心
 く、久米の仙人可笑しいことよ、うその顔みてだまされた

や、やいとおすやれ孝行ものぢや、親も喜ぶ身も無事な
 ま、敗けることをばきらやるげなが、なぜに慾にはよう勝たぬ
 け、けはひけしやうで外から塗れば、むさい心は塗られまい
 ふ、古いものほど重寶ならば、初め知られぬ我心
 こ、虚空無天に御廣い住居、柱なければ屋根もなし
 え、縁にひかれて心はうつる、悪いことには交るまい
 て、天の恵みで無い物ないと、恩にきせねば恩にきす
 か、あたら心に思案の添へ木、それがつかへて動かれぬ
 さ、さても心は奇妙な物ぢや、覺えしらねど覺えしる
 き、來たら來たまゝ去りや去つたまゝ、とかく思案は皆くすぢや
 ゆ、夢の世ぢやとは口にはいへど、ねごとといふのが物ほしや
 め、眼にも見えねば音にもきか、すされど無しとも思はれず
 み、見たい知りたいたいその心ざし知れば、知らるゝ我心

- し、知れば知らるゝ心を知らで暮す、人こそはかなけれ
 を、得たる心を失ひなりで、死んでしまふはあんまりぢや
 ひ、貧と福とは天命なれば、わがのまゝにどもならぬ。
 も、もがき貧乏する人多し、ならぬもうけを仕たがつて
 せ、世智で金をば持てゝも慈悲で、人を救はにや金の番
 ず、住めば住吉、赤子の心これが目出度い岸の松
 京、京の太平樂、樂々の身に外の願はみな榮耀
 引法大師教訓歌といふのが「百物語」にめる、果して弘法の作か否か、歌の巧か拙かを判断
 しただけでは判らぬところに、數へ歌の類の妙所があるともいへやう。
 ◇一つある心を知らで皆人の、しどろもどろに物をこそ思へ
 ◇二つともあらざるものをなどされば、みがきても見よ智慧の鏡を
 ◇三寶にいのらぬとても皆人の心の鬼の角を落せよ
 ◇四大とは地水火風をかりあつめ、かへさずとてもかへる大空

- ◇五體とてかりの現世に顯はれて出るも入るも迷ひなりけり
 ◇六道と思ふ心せ迷ひなり思はぬもまた迷ひなりけり
 ◇七佛の世に出でざりしその先は、たゞ暗の夜に音も香もなし
 ◇八萬の諸經をとくは何ならんたゞ一すじのみちをしへ也
 ◇九ゆるとも今はかなはじ生れ來て必ず死ぬるならひある世を
 ◇十惡を除く心のなかりせば一時の間も極樂はなし
 『舊傳集』に身のほどを知れの歌といふのがある、之れは冠字歌であるが、序だから茲に採録
 する。
 みきくごと人の上とてそゝるなよ、後は我身にむくひこそすれ
 のがれ得ぬ生命を惜しむ人はたゞ、誠の道を知らぬ故なり
 ほししとて無理をいひとる人の身はたゞ霜枯の草の如くぞ
 ともだちと思ひながらも敵と見よ親しくなるも心ゆるすな
 をこたらず我道々を知る人は何につけても頼もしきかな

しらぬこともいひたてをする人の後は我身の仇とこそなれ

れんくゝに主人の親子の間には忠と孝との道をあんぜよ

南品川漁師町中山洞泉氏から、同氏の左の數へ歌を寄せられた。數へ歌は他にも澤山あるが

これで打切つて、また他の方の診斷に取りかゝることにいたします。

い 出や此世に生れては

ろ 露命も僅か朝顔の

は 花の盛りも僅かなり

に 憎くき可愛ゆき薄きうち

ほ 恚しき憎きの薄きうち

へ 片時も油斷すべからず

と 兎に角勇み讀書は

ち 力づくには行かんぞよ

り 利口の人も無筆では

ぬ 貫らぬ顔に耻は多し

る 類に寄りては何事も

を 覚えて悪きことは無し

わ 我身を降げて人を立て

か 神や佛に誓ふても

よ 餘處の悪事は語るなよ

た 假令貧しく暮すとも

れ 禮儀は常に心がけ

そ 龜末に物を遣ふなよ

つ 常に我身を願見て

ね 寝ても起きても親の恩

な 何んに就ても想ひ出せ

ら 樂を好むは身の亡び

む 無益の金錢遣ふなよ
 う 嘘をいはぬが身の世
 ゐ 急がぬ人も透ならば
 の 後よ明日よと延ばすなよ
 お 老ての怨み返らんぞ
 く 苦しき時の神頼み
 や 病募りしその時は
 ま 間には合はんと覺悟せよ
 け 喧嘩口論諸惡事
 ふ 不幸の種と思はれよ
 こ 心の鬼が身を責める
 え 得手と勝手を棚に上げ
 て 天下の掟國の法

あ 仇だ疎そかに思ふなよ
 さ 差手引手に身を責めて
 き 飢寒を忍び勤むべし
 ゆ 雪や螢を集めても
 め 名譽を得るは根次第
 み 身より引出す財寶は
 し 死しても盡きぬ寶ぞよ
 る 圓満利益も心より
 ひ 貧に落るも心より
 も 若しも家業の暇には
 せ 先祖祭を怠るな
 す 好こそ物の上手なれ
 京 今日 今日の言葉を忘るなよ 今日 今日の心を忘るなよ

屁ものかたり

屁の語源

屁に因んだ屁理屈をいさゝか述べて見よう。先づ屁の字を分解すると「尸」と「比」の二字になる。つまり「尸」は人間の俯向きに伏した形ちであり「比」は音を現はしたものである。お尻をおつ立て、俯伏してピー(比)と放つからである。又「穴冠」と「氣」を一字に組み合わせせ或ひは「米」扁に「費」のつくりをあしらつてもへとも讀ます。何れも文字の構成したところをよく見れば、成程と領けるものがあらう。

尙、北京語では屁を「ピ」と發言し、また佛蘭西語では「ペ」(Pet)と云ひ、英語では「フアート」(Fart)と云ふ。何れも屁に對する聽覺が元となつてその語源となつたらしう。日本で

も奥州あたりでは「屁」を「フェ」を發音して「フェをフイる」といつてゐる。

又すかしつ屁のことを佛蘭西語では「ヴェツス」(Vessie)といつてゐる。つまり「ブスツ」といふ程度なのであらう。

おならの語源

次ぎはおならであるが、一説に「尾ヲ鳴ラス也」とあるが、どうも是はこじつけらしい。

それより面白い考證が「宇治拾遺物語」の中にあるから、左に抜萃して見よう。

藤大納言忠家といひける人、いまだ殿上人におはしけるとき、びゞしき色好みなりける女房と物いひと夜ふくる程に、月は晝より明かりけるにたへかねて、御衣を打かづきてなげしの上のほりて、おふぎをかきて引よせられる程に、髪をふりかけて、あなあさましといひてくるめきける程に、いと高くならしめてけり。

先づこれが文獻にあらはれた「おなら」の濫觴らしい。後日敬辭の「お」をつけて「おなら」となつたのであらう。

その他梵語では、屁のことを「下風」又は「風病」とも稱してゐる。外に又「轉失氣」といふ異名もある。落語の「轉失氣」は往々高座に於て演ぜられて、大いに顎を解かせられる。尙「屁袋」といふ語があるが、これは盲腸のことらしい。又「屁眼」といふのは肛門の異名で支那の言葉である。

屁の科學的分析

少し専門的になりすぎるか知れないが、次に屁の科學的分析を試みて見よう。
 先づ一握りの屁を捉へて分析を試みると、絶對過半数を占めてゐるのは窒素であつて、全體の五九、四。第二はメタン瓦斯の二九、六。第三は炭酸瓦斯の一〇、三〇。第四は酸素の〇、七である。その他硫化水素、水素、メチルメルカプタン等の少量と、インドール、スカトールが含まれてゐる。此奴が鼻持ちならぬのである。しかし、此各成分の量は、人夫々の體質及び食物によつて多少の差はある。
 更に屁の成分個々に就て調べて見ると、窒素は食物攝取の際嚥下した空氣から發生するので

ある。

酸素も同じく嚥下空氣から發生するが、之は窒素とは違ひ、腸内に發生する還元性物質の作用を受け、尙又腸の呼吸の爲に消費される結果、極めて少量である。

炭酸瓦斯は、消化器内にて發生し、含水炭素物も酪酸酸酵及び乳酸酸酵によつて發生する。又メタン瓦斯は、腐敗酸酵に依つて發生する。その他の硫化水素は蛋白質腐敗の産物であり、水素は酸酵から、インドール、スカトール、乃至は又メチルメルカプタンは、何れも蛋白質腐敗から發生するのである。

而して屁の臭いのは多量のスカトールを含んでゐるからである。これは恰も卵の腐つたやうな悪臭を放つ。

屁のも一つ臭い譯は硫化水素の匂ひである。之も印の腐つた様な臭ひがする。又蛋白質腐敗によつて生ずる瓦斯も、屁の悪臭に大ひに助力してゐる。

屁はどうして出るか

然らば、屁はどうして出るか？ 固苦しい解釋ばかりつゞくが、之も序論として止むを得ないのであるから、暫らく御辛抱あれ。

先づ我々が攝取した食物は何れも、胃から小腸に入つて胆汁、膽汁、腸液等の共同作用を受けて消化され盡されたものが腸壁を通過して漸次血液の中に吸収されるのであるが、攝取物が腸の中に於て受ける化學的變化として他の重要なものは、含水炭素及び脂肪の酸酵分解、蛋白質の腐敗分解である。屁の原料である腸瓦斯の大部分は即ち此酸酵腐敗によつて生ずるのである。

大體人間の腸の中には無数の細菌が存在し、活動してゐる。しかし小腸内の細菌は數に於て大腸内より遙かに少く、且つ屁の製造には直接關係がない。一方大腸内の中には粘草桿菌、乳酸酸酵菌、大腸桿菌、ブイソクレルブリオリ、ブルテウス等いろ／＼の細菌がウヨ／＼してゐるが、就中乳酸酸酵菌は腸瓦斯を發生を誘起する特性を備へてゐる。これらの瓦斯體は循環機能に障害のない限りは形成直後に吸収されるが、過重に發生した場合は十二指腸の上部から胃及び口腔を経て暖氣となつて出る。さうでないものは屁となつて直腸から排漏される。此瓦

斯が腸の中にたまると、腸は自發的に頗る迅速に回轉運動を始め、圈狀收縮をなして瓦斯を下へ／＼と押し出してゆく。之を腸の換氣作用と稱してゐる。

要するに屁の原籍は小腸に非ずして大腸である、而して、暖氣と屁は切つても切れない兄弟分である。

尙繪に描いた屁は何れも黄色く描いてあるが、之は糞便の色からの聯想から來たもので、事實は無色透明である。

屁の効能

攝取した食物が完全に消化し、腸内に於ける瓦斯をすつかり吸収し盡してしまへば、屁も放らずにすむであらうが、それは到底實際に於ては不可能である。故に屁の出る方が自然であつて、出ないとすると一命にもかゝはることとなる。大抵の人はブーツと一發放つと腹がスーッと空いて來るやうで氣持のよいものである。

急性腸閉塞の中鼓腸といふ病氣にかゝると腸の運動性神經に故障を生じ、腸内の腐敗性機能

が烈しくなり、且つ吸收機能が減少するから腸の中には多量の瓦斯が溜るけれど屁は出なくなつて来る。かうなるとお腹が張つて来て叩くとボン／＼音がする。何しろ屁の原料は何れも有毒瓦斯故、之が血管に入り体内を循環して各器官に種々の障害を及ぼす、そして遂に腸の自家中毒を起して壽命を縮めることになる。又血管に入つてゆかない他の有毒瓦斯は、上昇して横隔膜を壓迫して、往々肺や心臓を押し上げ、呼吸困難、氣絶、虚脱、又は腦充血を起したり、或は餘病を併發して重大な結果を招來する。

古來屁の三得として「腹空いて宜し、尻の塵拂へて宜し、人に嗅がせて氣持宜し」とある、或は又「屁は藥千服」とか、實に屁の効能偉大なりと謂ふべきであるから、どし／＼遠慮なく打つ放すがよい。

古今放屁名人逸話

さていよいよ本文に入つて古今放屁名人の逸話を紹介するとしよう。所で先づ近世に於ける第一の名人といふのは安永三年頃兩國で見世物に出た霧降花咲男といふのが大評判だつた。

又同じ頃曲屁福平といふ男が、大坂へ下り道頓堀で屁の曲放りを興行して大當りを取つた。

この男は三味線や小唄淨瑠璃に合せて面白く屁を放り分けたさうだ。平賀源内はこの曲屁を題材として有名な「放屁論」を著した。又利に敏い大坂人は放屁薬を賣出したりした。

ついで、梅川忠兵衛の封切りで名高い大坂新地榎屋から綾鶴といふ前代未聞の放屁太夫が現はれた。端唄の綾鶴は實にこの放屁太夫に端を發するのだといはれてゐる。

下つて明治時代になつてからは、相州津久井郡千木良村に屁又といふ緒名の人がゐたが、放屁の名人として近隣にその名を轟かした。

この男の一生一代の曲藝といふのは、隣村の興津神社の五十段の石段を、一段登る毎に一發宛放屁し、最後までやつてのけ、なほ餘裕綽々だつたといふ。この先生一寸腋の下を手で動かすと即座に連發したさうだ。

ついで有名なのは静岡縣濱松郡芳川村の屁國先生こと伊藤國太郎といふ製糸工場主である。

この人の放屁體研究に志した動機といふのが面白い——何でも舊幕時代には濱松附近では非常に放屁が流行したさうだ。屁國先生の若い頃、濱松城主井上河内守の家來で宮地市兵衛とい

ふ武士が尻が上手で、熱心に獎勵したからださうだ。その市兵衛は常々放屁は神祖家康公から傳つた吉例だと稱してゐた。——といふのは、家康が天下統一の後、諸大名出仕の席下で、どろしたはづみにかブツと一發洩らしてしまつた。諸大名は噴笑しさうだつたが、何しろ家康の面前なのど笑ふ譯にはゆかない。その苦しさいつたらない。と、その時、紀州侯が何思つてかつか／＼と進み出た。

「兵(屁) 權既にお手に歸し、祝着至極に存じ上げ奉る」

すると、今度は尾州侯が負けぬ氣で進み出た。

「武(ブウ) 運長久祝着至極に存じ奉る」

入れ代つて次は水戸侯。

「天下泰平(屁) で誠に祝着至極に存じ上げ奉る」

これには一同スツカリ閉(屁)口して感じ入つたさうだ。

——故に徳川家の家臣たるものは文武兩道以外にも放屁を心得ねばならぬ、といふのが市兵衛の我田引水なのだつた。屁國先生はすつかり感心して、それ以來屁の修業に志したのださう

だ。何とふるつてゐるではござらぬか！

所で、稽古中は甘諸や午莠の類を盛んに喰べたさうだ。次に曲屁の種類を紹介しよう。

▽颯の一聲啼 音より臭氣を重んじ、一發にて座中の者を辟易させる。

▽蛇の蛙吞 ギア／＼と蛙が蛇に吞まれかゝつて苦しむ聲になぞらへ、最後にギユツと吞んでしまふ。

▽すれ違ひ 妙齡な婦人等とすれ違ふ際放るので、臭氣より音を大きくし、相手を大ひに面喰はせる。

▽數取り 一二三と算へ乍ら連發し、その數の多きを誇る。

▽梯子尻 數取りの上達したもので、五段七段十三段の三種がある。五段といふのは梯子の堅木が二本に横木が五段。これに做つて先づ長く二發放り、それに横木の少し短いのを一本添へ更に兩方へ楔として短いのを二本放り出す。五段ならこれを五度、七段なら七度、十三段なら十三度重ねる。

▽蛇の笹渡り 笹の葉を渡る蛇の羽音になぞらへ、ブル／＼と十四五度鳴らし、最後に笹葉を

滑り落ちる様にブルツと一發、最も力をこめて放る。

▽ふくべ 初め大きく中を小さくすぼめ、それからやゝ大きくし、これに口をつけ、最後に栓をポンと打つ、なほ黄色い音で紐を二條放りつける。

▽梅の古木、ブーツと大きくやつて梅の幹を放り、次にブーツと細く長く小枝を數多つけ更にブーツと花や蕾を添へる。

▽鶯の谷渡り、ブーツと尻つてその後をブーツと澤山つゞける。

こんな鹽梅で同地方には放屁家が頗る多く、従つて毎月放屁會を開催して、大ひに研究したとして毎年番付を作つたが、屍國先生はいつも横綱を張りつゞけた。明治四十年頃、放屁大會を開き、二十四名の選手が午後二時から夜の十時迄競技したが、採點の結果、先生は九十三點を占めて草鞋十足、酒一升、里芋五升の賞品をせしめた。次點はズット落ちて四十五點だつた面白い話がある。

或夜のこと、一人の男が偶然先生の家の前を通りかゝつてブーツと一發洩した、と、直ちにそれに應じて先生は家の中から二發の答禮を返した。男も何をも思つて同く二發酬ひた。する

と驚くべし、今度は先生が倍の四發返した、負けしみの強い男は逃げるのも癪たつたので大苦しみで取敢へず三發工面した、と間管を容れず先生は餘裕綽々として大いのを六發返報した。之には遺がのその男も尻髪を巻いて逃げ歸つてしまつた。が、何としても口惜しくてならないので、同志の者を五六人募つて、晝の間にウント尻の材料をつめこんで置いてから、仕返しに出かけた。そして代るく打つ放し、その數も仲々多數だつたが、先生は少しも騒がず、一々その倍數を返したので、一同仰天して退却してしまつた。斯程の先生であるが、一度江戸から來た某といふ者に他流試合を申込み申込まれたことがある、先生は高を括つて試合に應じたが、どうして仲々の剛の者で遂々先生兜を脱いでしまつたさうだ。残念乍らその剛の者の名前が知れないが、さしもの屍國先生を降参させたといふのだから或ひはこの人こそ日本一の放屁名人かも知れない、因みに先生の三男榮一、も先生の後繼者としてその名を恥しめなかつたとか。

以上は日本の放屁名人だが、佛蘭西にも曲放りの名人が二人あつて「音樂肛門」と呼ばれてゐるさうだ。何でも肛門内に氣瘤があつて笛のやうな作用をし、いきみ加減で、呂律に合はせることが出来るとか。又他の一人は隨意に大腸内に空氣を吸入し、その空氣を肛門括約筋の自

由開閉によつて、風琴や喇叭のやうな音を吹き出すことが出来るのださうだ。

へ の 小 咄

品 川 (三宿の尻)

女郎スツと一發洩したか、さすがに極り悪く頻りに臭ひを消さうとしてゐる。」

客「モシ花魁、何をしてゐるんだえ」

女「アレ御覽よ、あすこに綺麗な帆掛船が通るから見てゐるのさ」

客「成程、ありや肥料船だな」

新 宿

バタ／＼と重たそうな草履を引ずつて這入つて来た女郎、よく寝入つてゐる客の枕頭に坐る途端にブーッ。ハツと顔を赤くしてもち／＼してゐると、客がムク／＼と眼をさました様子

女「モシお前さん、今の知つてるの」

客「イ、ヤ、よく寝てゐたと見へて何も知らねえ」

女「さう、そんなら何でもないので」

と、安心した途端、またブーッ。

客「オヤ、さつきのよりでかいぜ」

千 住

どうも尻癖のよくない花魁、よく客の前で恥をかいたので、いろ／＼思案した擧句、禿に金をやり尻の罪を引受けさしてゐたが、今日も引付けで、初會の客の前へ氣取つて座る拍子にブーッ。

女「オヤ、この子は本當に仕様のない子だよ、いくらいつても直らないのかね」

禿の尻を抓らうとする途端に、又大きな奴をブーッ。

禿「アラ花魁、二つちや安いわ」

風が腐る

或金持が大きな袋に風を貯へて置いて、夏になつて暑くなると袋の口を少し宛出して涼んで居つた。或る日主人の留守中に小僧たちが密かに此袋を持ち出して中の風を使つたはよいが、餘り出しすぎて袋が萎びてしまつたから、その埋合せに大勢で屁を放り込んでふくらませておいた。斯くとは知らない主人は歸つて来て例の通り袋の口をあげると、中から臭い風が出て来たから「餘り暑いので風が腐つたわい」

姑と嫁

嫁の前で爆發させたが、姑は怖い顔をして「何です、不法な」と叱りつけた。嫁はとんだ冤罪だが逆はずに託言をして「放屁する人は長命ださうですね」といふと、姑「然うかえ、そんなら今のは私だよ」

代診

或醫院へ治療に来た婦人の患者が院長の前でつい取外した。すると流石は院長「どうも私は近頃耳が遠くなつて」といつたから、その患者も氣まりの悪い思ひをせずすんだ。これを聞いた代診は早速應用して見ようと待つてゐた。或日矢張り婦人患者が一發放した。代診はこゝなんめりとはかり「エヘン、私は近頃耳が遠くなりまして、今の屁も何にも聞えません」

座頭

ある茶屋の座敷で客がおやまと火燵に當つて遊んでゐる時に氣の毒なことぢや。出ものはれもの所きはすとおやまが放屁をすつとした。その辯音のせぬじやによつてひくと、おやまははつと思つた。けれどもさすが勤めする身ぢや。鏡袋から伽羅を出してそつと薰べてまぎらさんとする。その例にゐる座頭が鼻ヒコ／＼して「モシどこぞ此邊に木薬屋はござりませぬかへ」おやまが「何としたへ」座頭が「ハイどうやら木薬屋に蕪取るやうな匂ひが致します」

あぶく

子供をつれて銭湯に行つた親父は湯槽の中で内證で一つブウと放つた。あぶくが一つボカリ早くも見つけた子供「ママ面白いな、お父つちやん、もう一つあぶくを出しておくれよ、ネーお父つちやん」親父困つて手拭で玉をつくり、押つぶしておぶくを出し「どうだ〜」といへば子供怪訝な顔をして「お父つちやん、こんどのは臭くないね」

狂歌屁づくし

山重にしりごみしつゝ入りしよりうき世のことは屁とも思はず
四方 赤良
あと先へ息やいづらむ賤の女が尻ほつたてゝ吹く火ふき竹
平 群 實 梯
いかづちのそれにあらぬか尻の音に臍を抱へてにぐる人々
平木庵 東水
蚊帳の穴すかしてぬける屁の烟は心太にや出でゝゆくらん
梅 亭 金 登
めどたうと門すぐる子の放屁こそ年の初めのおとし玉かも
鶴

戀ひ慕ふ妹に逢はねばよすがら落す屁にさへ香りとてなし
以 雲
湯の中の屁のたま〜に逢ふ夜半はみも浮くばかり嬉しかりけり
讀 人 不 知
鐵砲の筒はむけねで放ちたる屁にはあたりの人のしりぞく
南 湖
よる人の皆はら〜とちりぬるはいろはの文字のへにぞありける
光明館 光凡
びいどろを逆さにつるす器量ゆえ屁まですかして見せる少女子
泉流館 貴能

都々逸屁づくし

好いちやをれども愛想がつきた、舟を漕ぎ〜屁をたれた
くさい管ちややおならだものを、にほいなければ只の風。
氣になるおならエヘンで消して、すました顔する人の前、
すどむふりして糞子にもたれ、そつとすかした人の前。
まさかそれともいひ出しかねて、娘伏目で赤い顔。
惚れた中でも我慢が出来ぬ、手をとる拍子すかしへ。

芋の煮ころばし火事よりこわい、胸がやけたり尻が出たり。
 芋食や尻が出る尻をひりや小言、ほんにやる瀬がないわいな
 玉に瑾だよあの主さんは、やたらどこでも尻をたれる。
 何處へそれたかお前のおなら、音したばかりで雲がくれ。
 聲はすれども姿は見えぬ、ほんにお前は尻のやうだ。

川柳 尻づくし

佐野の馬さて首をたれ尻をすかし
 かく鼻はまゆをひそめて言上し
 尻をひつてすかしくもない一人者
 尻をひつて嫁は雪隠出にくがり
 一大事花嫁どうか尻が出さう
 いよ玉やなぞとへつびりわるふさけ

尻をひつた方が居角力負けになり
 湯の中でひる尻の玉は肩へ浮き
 あのが罪おのれをせる紙帳の尻
 乳母の尻は子のほつべたで紛かし
 韓信があたまの上で一つひり
 水入れは湯でへをひるに異らす
 川越しの肩ですかして叱られる
 湯で放つたへの玉あごの下へ浮き
 居眠つて下女細長くへをすかし
 齒磨は麝香のへほど匂ふなり
 不禮講へをひつてイヨ玉屋なり
 念佛とへばかりひつていゝ姑
 只の風よりましならめ火のへ

大臣にへをひつかけ馬車の馬
もみ尻をする下女芋のむくひなり
音も香も空へぬけてく田植のへ
馬のへのさかさひやく一の谷
へをひつた奴から鼻を先づ摘み
へをひつてオヤ坊さんと乳母とほけ
溜息を尻からついて叱られる
客のへをさそくな遣手しよつて立ち
馬のへの眉間をかする小侍
南無あみだ佛とへをひり芋を喰ひ
馬のへに四五人困る渡し船
海士の放ひ百丈上で泡となり
こりや書かきへはいつの世に見て置いた

大笑ひ下女の寝言にへがまじり
太鼓持金になるへを二つひり
姑のへをひつたので気がほどけ
炬燵から猫もあきれて顔を出し
手を合せ佛間の前で放ひなり
韓信に意地の悪いがへをかよせ
据風呂の放ひ背中へかけめぐり
どこでどうするか娘のへをきかず
風上で意地の悪いのがへをかよせ
への騒ぎひり手は中にすましてる
へをひつた嫁は酒でも呑んだやう
力持なら一つで腰がぬけ
嫁のへに五臓六腑をかけ廻り

姑しよめばと咳せきと同時に一つひり
 汝等なんぢらは何なにを笑わらふと隠居いんきよのへ
 外そとでへをひる雪隠せきいんの居ゐ催促せきせつ
 へをひりに雪隠せきいんへゆく賢夫けんぷ人ひと
 へをひつたのでその人ひとのゐたのが知れ
 したゝかに鳴ならして佛家ぶつがの門かどを出でる
 いざりのへ蟻あまぎの行列ぎやうぎつふきとばし
 尻しつぽと顔かほ兩方りやうほうへ出でる娘むすめのへ
 あなたととへをゆづり合あふむつまじさ
 へを殺ころしあたり四五人にんかゝりあひ
 へをひりに屋根やねからおりの宮みや大工だいこう
 へをひつて裾すそあふぎたる團扇うちあしなか

永ながき日ひや枕まくら香かほもたかす屁へもひらす

(本篇執筆に際し福富謙部氏の「著」屁に得る所妙からざりし事を深謝して置く)